

白露日記

秘魯日記

山口

慎誌

(山田紙店製)

(靜光堂製)

明治貳拾貳己丑歲余齡四拾四東京京橋區尾張町ニ西洋酒
ノ問屋ヲ營ムコト茲ニ拾貳年ナリ五男三女ヲ設ケ衣食足
リ家族繁榮ナレ氏只此儘ニテ老去ランモ最本意ナク思ヒ
タル折柄明治五年初テ洋行ノ時ノ一友人ナル大倉喜八郎
氏ヨリノ交渉ニ依リ札幌麦酒會社へ三年程行キテ獨逸人
ノ技師ヲ相手ニ監督ヲシテ貰ハレ間敷哉トノ事ニテ大分
話モ進ミ居リ明日ハ委負長澁澤榮一氏へ同道面會シテ取
極メ度トノ事ナリシカ同時ニ又日秘鑛業會社ナルモノ起
リテ日本ニハ藤村紫朗高橋是清氏等ヲ始メ紳士紳商貳拾
五人ニテ 萬圓ヲ出シ秘魯ニテハ獨逸人ヘーレン氏
萬圓ヲ出シ都合 萬圓ノ資本ニテ同國ノ銀山ヲ開掘

スル爲ノ辱交高橋是清君此委負長トシテ出張スルニ付之
ニ附隨シテ共ニ行キテハ如何ト云フ問題ニ接シ取捨去就
即時ニ決セサルヲ得サル場合トハナリ又因テ考フルニ札
幌行ハ其事業今日マテ仕来リノモノト同一ニテ殊ニ蝦夷
地ノ事ナレハ他ニ身心ヲ益スルモノナシ秘魯行ハ其事業
或ハ盛大ニ趣クノミナラス初テ行ク國故ニ見學上ノ利益
モ多ク之アルヘク殊ニ皇國現下ノ形勢至テ沈靜ニシテ大
ニ國力ヲ世界ニ發展スルノ氣慨ヲ認ノス好シヤ此行万一
不如意ノ事アルハ先以衆ヲ將井テ事業ヲ海外万里ノ郷ニ
試ミバ後來又其志ヲ繼クモノアリテ大ニ國威ヲ海外ニ擴
張スルノ端緒トモナランカト俄然志ヲ決シテ札幌ノ方ハ
之ヲ断リ秘魯行トハ決断シタル次第ナリ

吾乃中よためしん事の始めあり

成るも亦らぬも亦之母のたえ

斯クテ秘魯ニ在留スヘキ高橋委負長ハ既ニ一度談礦山ノ
驗查ヲ遂ケテ歸朝セルト云フ技師田島晴雄ト同伴其年ノ
十一月ヲ以テ秘魯ニ向ヒ出發セリ時ニ余ハ藤村委負長ヨ
リ左ノ命ヲ受ケタリ 此度ハ秘魯國カラワクラ礦山試掘
ノ夕ノ礦山技手坑夫大工人夫等合計拾七人ヲ送ルニ付其
レ等ヲ監督シテ秘魯ニ連レ行ク事又試掘ニシテ好結果ナ
ル片ハ更ニ教千人ヲ送ル事モ之アルヘキニ付北米桑港
ニ着ノ上ハ他日ノ豫算ヲモ立テ度ニ付船舶ノ割引等モ掛
合ニ又秘魯ニテ家屋ヲ建築スル事モ之アルヘキニ付其材
料相場等道々取調ヘ行キ又秘魯ニ着シ召シ連レ人ヲ先方

へ引渡シタル上ハ此礦山事業ニ附帯スル農商工ノ事ヲ充
分ニ視察シ一度帰朝スル事ト此ニ於テ余ハ匆々行李ヲ整
へ同年十二月三日ヲ以テ該十七人ヲ引率シテ横濱ヨリ米
國汽船ヱルジツク號ニテ出帆セリ因ミニ記ス余ハ老母ニ
嘗テ三~~年~~男ト戒メラレタル事アリ因テ以来ハ事業ノ變更
ハ致シマスマイト尾張町ニ斯業ヲ營ミテヨリ今日ニ至ル
迄動カサリシモ四方ノ志勃然トシテ押ヘカタク遂ニ此度
ノ決心ヲ~~發~~シタモノノ老母ノ思召如何ト案シナカラ許可
ヲ求メタルニ快諾サレタル次第ナリ

たうちぬの母の心のたけきさなり

八重の潮路もいさみて申く

此行皆少壯血氣ノモノナレハ稍モスレハ直ニ腕力ニ訴フ

(山田紙店製)

ルノ風ヲ見タル余ハ獨心ニ決スル所アリ我一行元ヨリ少
人数ノ事ナレハ如何ナル場合ト至モ決シテ腕力ハ出サシ
メス只管誠意ヲ以テ万難ヲ排除スヘシト然ルニ横濱出帆
ニ先々大工職久万勇六黄色ノ蓑ニ入レタル棒様ノモノヲ
携帯ス余怪ミテ夫レハ何ソト尋ヌレハ護身用ノ刀ナリト
云余曰今ヤ營利ノ事業ニ趣クニ刀劍ハ無用ナリト之ヲ止
メテ置カシム又此一行中ニハ生レ落ルヨリ礦山ニ入りタ
ルモノ及他ノ勞働ニ従事スルモノ耳ナレハ嘗テ洋服ヲ着
シタル者モ少ナク元ヨリ又横反等ヲ讀ミ得ルモノナクレ
ハ一步國ヲ離ルル以上ハ言語起居ハ勿論惣テ荷物ノ世話
ニ至ルマテ皆余一人ノ責務ナレハ却々容易ノ事ニアラス
然ルニ彼等ハ初ノテノ海外旅行ナレハ何レモ心配シツツ

アルハ無理ナラヌ事ナリ依テ余ハ嘗テ米國ニ渡航セシニ
海上殊ノ外穩カナリシカハ彼等ヲ慰メテ勇氣ヲ付ケサセ
ント此太平洋ハ其名ノ通り至テ平和ノ海ナレハ決テ風波
ノ為メニ苦ム様ノ事ハナイカラ何レモ安心シテ行ケト傳
ヘシ然シテ余ハ小池ト上甲板ノ室ニ入り其他ハ皆下層室
ニ雜居セリ船漸ク房州岬ヲ廻ル頃ヨリ北風猛烈ニ吹キス
サミ之ニ加フルニ雪ヲ以テス其氣象實ニ凄シク船体動揺
シテ人々生キタル思ヒモナキ程ナリシ

雪凡ヨク帆何けむけふあつまふだ

心もひろき大丈夫のたび

河つまふと黒潮の浪もたれハ

いつあえうせー富士のふ雪

凍

西風淅瀝送扁舟知是黑潮萬里流

浪鼓硝窓人未睡一輪大月照皇州

(山田紙店製)

行クニ隨テ山ノ如キ怒濤ハ上甲板ニ注キ續々三尺通り奔
溢スレハ即チ水面以下三尺ノ如ノ急流ニ逆行スルト更ニ
異ル事ナシ余等ノ考ニハ是レ必針路ヲ誤リテ何レノ方向
ニカ吹き流サレタルニ相違ナシ連モ定期間ニハ彼岸ニ着
ク事ハ叶フマシト寧口新島嶼ニテモ衝キ當リナハ一興ナ
ラン杯妄想ヲナシタリキ此時チーフト(一等運轉手
)ハ凜烈ナル寒風澎湃タル怒濤ヲ侵シテズボシヨ捲リ上
ケ甲板上ヲ縦横ニ奔走シテ働キ居タルカ寒氣ニ耐ヘ得ス
時々我室ニ来リブランデー等ヲ請フ余ハ是ニ供給スルヲ
以テ一ノ義務トシテ懇ニ響應スレハ彼ハ酔夕勢ニテ又飛

ト出シ勞働セル事遂ニ四晝夜ナリキ將又我室ハ拾有八人ノ飲食物ヲ盡ク保管セル倉庫トモ云フヘキモノナレハ酒味噌砂糖醬油其他日用品ヲ収メ置キタル如ク前ヲ締メアルニモ拘ハラズ其寸隙ヨリ潮水注入シ来リテ室内ハ急雨ノ如ク矢張深サ三尺ノタシト同様ナリ然ノミナラス船体動搖ノタメ保存セル物品ハ互ニ鉢合セテ爲シ轉倒シテ瓶詰ノ酒麥酒、ブランド「醬油等ハ盡ク破裂シテ砂糖味噌菓子等モ之レニ混化シ減茶々々トナリヌレハ餘リニ歎ケカハシサニ責メテハ酒類タケモ救ヒ置カント寢台ヨリ手ヲ伸シテ之ヲ取り上ケントスル刹那船体震動シテ余ハ其溜レル混交水中ニ真逆マニ落込ミ又是ハ叶ハシト直ニ飛ヒ起キ卧床ニ戻リテ一生懸命ニ取り付キ居リテ最早成リ

(山田紙店製)

行キニ任セタリ

冬の夜のあまきも志す旅枕

君と母との夢のうきふね

斯クテ四晝夜ノ後ハ風止ミ浪モ亦隨テ穩カニナリ一同安堵ノ思ヒヲ爲セシカ風浪怒號ノトキニハ山口サンハ實ニ我等ヲ欺キタリト怒ミシモノアリシト云余モ亦神ナラヌ身ナレハ如何トモ爲術ナケン尔来天氣續キニテ桑港へ着クモ兩三日ト云フ或夜月落チ人定リタル頃俄然下層ニ大騷擾アリ同時ニボート、ゴック等ノ支那人ハ怒ムカ如ク泣クカ如キ悲鳴ヲ揚ケドララ打チ叩キ東西ニ馳セ廻ル何事ナラント行キ見レハ下層ニ同居セル日清人無慮百人計リ惣立チトナリテ格闘シツ、アリ余之ヲ鎮メントスレバ到

底見込ナキニヨリ直ニチーフノトニ通シ君ニ此始末ヲ
一任スルカラ鎮静セシメ呉レヨト頼メハ彼ハ領キテ直様
其場ニ驅ケ付ケ難ナク之ヲ取り鎮メタ抑此騷キノ起リト
去フハ清國人ノ數十名ハ下層ノ平面ヲ占領シ習慣トシテ
乗船スルト直ニコツク等ト交渉シテ飲食起居ノ自由ヲ得
ルニ引替ヘ日本人ハ皆棚床ニ雜居シテ飲食ハ支那コツク
ノ宛行扶持ナレハ副食物トテモ梅子又ハ澤庵漬位ニテ僅
ニ飢ニ充ルノミナレハ甚以テ不愉快ナル境遇ナリ然レモ
ナラス清國人ハ日々交ルマ々豚尾ヲ束ヌル故ニ所々ニ毛
髮ヲ飛ヒ散ラシ潔癖ナル日本人ニ迷惑ヲ與フルモ更ニ意
トセス其横放宥リナキ有様ナリシカハ或日本人ハ半激半
戲ニ出シカ眠リ居タル清國人等ノ豚尾ヲ両々相結ヒ付ケ

柱ニ確ト結ヒ付ケ置キタル如何心ナク起キ上リタル彼等
ハ頭髮ヲ根元ヨリ引抜カルノ計リノ苦痛ヲ感シ其喚聲船
内ニ響キ渡ルト共ニ大活劇ハ演セラレキ彼等ハ已カ側ニ
居合セタル日本人ノ仕業ト一途ニ思ヒ込ニ短氣ニモ其人
ヲ毆打シタルカ是レハ加害人ニアラサリシカハ大ニ立腹
シ互ニ打チ合フ如ヘ相方ノ味方亦烈敷渡リ合ヘ番物ヲ打
破リ誰彼ノ差別ナク打合ヒタル次第ナリキ依テ余ハ船員
ニ注意シ以來ハ區畫ヲ極メ互ニ相侵サザル様致シ其後ハ
静ナリタリ此時今一瞬間ニテ危カリシハ或日本人カ太刀
ヲ抜テ斬リ掛ラントセシヲ我同胞カ後ヨリ抱キ留メタル
一事ナリキ

(山田紙店製)

愈明日ハ桑港着ニ付一同見苦敷ク之ナキ様ニト小池ニ命

シテ一同身体ヲ清浄ニシ衣服ヲ克ク拂ヒ正装シテ一度甲
板上ニ整列セシム然ルニ小池ハ已カ配下ノ坑夫等多キヲ
頼ミ余カ命ヲ奉セス余憤テ曰ク貴様等ハ初テ他國へ来リ
シ事ナレハ其習慣ヲ知ラサル故ニ人々ノ笑物ニナリテハ
氣ノ毒ト存スレハコソ今檢閲シテ置ント云フニ我儘ノ振
舞ヲ為スナラ勝手ニ行動セヨ余ハ一切個人ニ就テノ世話
ハセヌト言葉ツレハ同室ニ居リシ起立工商會社ノ新約克
支店員牛島某余カ言ヲ聞テ小池ニ注意シ君若山口君ノ命
令ニ違ハバ一同大ニ困難スヘシト云ヘハ彼ハ今更ノ如ク
驚キ起キテ一同ニ命ヲ傳ヘ皆正装シテ甲板ニ出テ余ノ檢
閲ヲ受ケ餘リ笑ハルノ事モナク上陸スル事ヲ得タリ何故
余ハ此ノ如キ令ヲ出セシカト云フニ坑夫ノ一人東京ニテ

(山田紙店製)

上野ヲ見物サセシ片小便セントスレハ「ズボン」ニ穴ナクテ
為ルヲ能ハスト云フ見レハ彼ハ「ズボン」ヲ後口前ニ穿キ居
レリト云フ笑話杯モ聞キ居リシ事アレハナリ
同拾八日好天氣船ハ静ニ金門港ニ近クニ及ンテ一同ノ歡
ヒ言ハン方ナシ其明媚ナル丘陵豪壯ナル建築物ヲ望見シ
テ皆時ヲ潰シ嗚呼斯ンナ美イ知ナレハ「カ、ア(妻)」ヲモ
連レテ来レハ宜カツタト歎賞シタリ本日ハ日本ヲ出帆セ
シヨリ丁度拾六日目ナレハ即チ豫定通りナリ如何ニ船長
始メ船員一同ノ熟練ナル技量ナルカニ感服セリ尤チ「フ
ノート」ハ言ヘリ余日米間ノ航海ヲ結續スル事茲ニ拾有八
年ナルカ此度ノ如キ大風波ニハ嘗テ出合シ事ナシト以テ
其如何ニ猛烈ナリシカヲ察スルニ餘アリ

船ハ汽笛ヲ鳴シテ桑港ノ棧橋ニ横着トナル嘗ニ余カ家ニ
寄宿セシ當領事館書記官早川鐵治ヲ始メ館員等余カ一行
ヲ迎ヘ萬事便利ヲ與ヘラレ余及小池ハコスモポリタンホ
テルニ宿シ其他ハ皆日本人ノ下宿屋ニ宿セシム便船ヲ待
チテ留ルテ數日一同所々ヲ見物ス市街ハ切石ヲ敷詰メテ
「ゲールカ」縦横ニ交通ス

遙小松平忠厚公の靈を吊らひ奉る

阿免りかやまふとの冥わやさ、ねと

わあおもふ人の物る日まふし

余ハ領事館雇リテヤルドソン氏ヲ頼ミ共ニ汽船會社ニ行
キ汽船賃將來ノ割引等ヲ談シ又木材商ニ就キ相場ヲ聞キ
且ツ運送方法ニ付交渉ヲ為セリ當時ノ領事ハ川北陸軍少

(山田紙店製)

佐ナリ余カ来ルヲ聞キ葡萄酒醸造家長澤 鼎氏ニ通ス故
ニ長澤氏ハ余ヲ迎ヘ葡萄酒販路ニ付交渉アリタリ
同廿三日パナマ行シチ、オフシドニ一号ニテ發ス天候險
悪ナリ先一同ノ場所ヲ極メタレ凡自分ノ居ルヘキ所之ナ
ク己ヲ得ス甲板上石油箱ノ上ニ大ノ字ニナリ天ヲ仰テ放
吟シ居タリ時ニ風波頗ル烈シカリシ船ハ長キカリホルニ
ヤ洲ニ泊フテ行ク事數日偶好伴侶ヲ得タリ夫レハ桑港ノ
礦山技師ナレ凡自ラ手卸シテ採掘スル人ナリ今回中央ア
メリカ、コロンビヤノ礦山ニ雇レ行クモノナリ日々親密ノ
談話ヲ為スウチ余カペルヘ行クト云フ事ヲ本ニ氣遣ヒ
夫レハ止メテハ如何ト忠告ス余ハ自分資金ヲ出シテ為ル
事業ニアラス今回特ニ雇レ此人々ヲ連レ行キ先方ノ會社

へ引渡シ然ル後ハ斯々ノ用向ヲ為シ一度帰國スルモノナ
リト去へハ彼ハ大ニ安心シテ夫レナレハ已ヲ得サル次第
ナリト去フ依テ余ハ折返シ如何ナレハ君ハ僕カ秘魯行ヲ
危険ト云フカト問へハ彼曰ク秘魯ト云フ國ノ人ハ概シテ
短氣ニシテ直ニ怒リ又直ニ和スルト云フ所謂「バード、テン
パー」ノ人ナレハ信認スルヲ能ハス何事ニマレ好シヤ政府
ト契約ヲ結フハ一朝大統領變更スル事アレハ前政府ノ為
シタル事ハ一向相分ラスト云フ有様ナレハ確實ナル事業
ヲ為ス事真ニ困難ナレハナリ云々ト余大ニ其忠言ヲ謝セ
リ尔来彼ハ「パナマ」ニテ別ル、追心切ニ余カ為ニ盡力致シ
クレ同所ニテ船ノ乗替切符ヲ求ムルニ付テモ大ニ割引ノ
掛合等為シクレ一切自分ノ事ノ如ク誠ヲ盡シクレ又帰路

ニ見舞トテ桑港ノ最大ナル工場等へ一々添書ヲ認ノ與ハ
ラレタリ別ヲ惜ミ再會ノ縁ヲ期シテ相分レヌ
同三十日メキシコノアカポルコ湾ニ入ル甚熱言フヘカラ
ス直ニ上陸日本及秘魯ニ電報シ台場ヲ一覽シテ去ル台場
戍兵共ニ見ルヘキモノナシ

(山田紙店製)

心雪のふる郷いで、去かすみ

多分ひき初め「先だしたの山

同三十一日即チ我國ノ一月一日ナリ
明治二十三年一月元旦ノキシユ海岸ヲ過ク此日晴天微風
アリ午前六時一同正服甲板ニ上リ六時十四分太陽ノ昇ル
ヲ待チ日本ノ方位ニ向テ新正ノ祝意ヲ表シ余カ室ノ入口
ニ國旗ヲ交叉シ豫テ用意セシ如ノ葡萄酒麥酒等ヲ開キ罐

詰肉林檎杯ヲ出シ共ニ祝酒ヲ酌ム各詩歌俳句等ヲ詠ス
同十三日中央アメリカノパナマニ着ス一同ヲハ船ニ残シ
余小池ト上陸シホ夕旅館ヲ定メサル前直ニ電報ヲ秘魯ニ
發セントス依テ電線ヲ辿リ行ケハ後ニ附隨スル色黒ノ青
年アリ彼類ニ余カ為メニ何事カ周旋セントスルモノ如
シ遂ニ電信局マテ来リ又余又道ヲ轉シテ然ルヘキ旅館ヲ
尋ホントスレハ彼亦就キ来リ余ニ問フ今宵何レノセヤ夕
山(劇場)ニテ興行スルカト余驚テ其故ヲ問ヘハ彼ハ余
ヲ輕業師ノ親方ト認メタリト云余大笑一番シテ余ヲ或ル
賣酒店ニ誘ヘト云ヘハオライト云ヒナカラ一酒店ニ
入ル此ニ余ハ船中用意ノ酒類ヲ求メ其青年ニ手當ヲ與ヘ
テ別レ又余及小池ハグランドホテルニ入り一同ハ翌日迎

ヘテ伊多利ホテルニ宿セシム

ふくろも同園生の波あま路ハ

わけやねん人のくさ

(山田紙店製)

便船ヲ待テ数日滞在ス同十八日エムマリヤル号ニテ出帆
ス船長始メ船員ノ最ナル部分ハ皆英國人ナリチーフメ
ト余ヲ遇スル事發ム余ヲチーフエンジ子ヤ室ニ誘ヒシ
ルクシエーキニウ井クキヲ入レ共ニ飲ム彼曰ク此船ノ
水夫ボレー等ハ秘魯敗戦後ノ浮浪人多ク盡ク盜ヲ為ス故
ニ充分ノ注意ヲ致サレ度シ若シ室ニ忍ヒ入ルモノアラハ
遠慮ナク打殺シテ差支ナシヒストル無クハ貸與セント云
余其乱暴ナルニ驚キ御心切ハ有カタイカヒストルハ入り
マセント辞謝ス尤手荷ハ皆船倉ニ預ケ入レタレハ一モ盜

難ニハ羅ラサリシ此日プロノ号数時間我船ニ先ツテ發ス船
長曰君憂フルナカレ明朝ハ我レ彼ヲ追抜カント果シテ其
言ノ如シ余等思ハス快哉ヲ叫フ行々南風微涼ヲ醸シ浪亦
平カニシテ甚愉快ナリ然ルニ下等ハ牛豚ト同栖スルノミ
ナラス其暇ニテ直ニ屠殺ヲ為シ炎熱ノ候健康ヲ害スルノ
懼レアレハトテ一同ノ願出ニ依リ條件ヲ設ケテ皆上等室
ニ移セリ同廿日赤道直下ヲ過ク同廿二日夜半ホーイ来リ
告ケテ曰ク一日本人裸体ニテ船中ヲ乱暴シ廻リ困ルニ付
早速来リ制シ吳レヨト余驚キテ行キ見レハ坑夫足田ノ醉
狂セルナリ乃一同ニ會シテ取押へ部屋ニ入レ錠ヲ卸ス彼
猶室内ニテ大騒キヲ為シツ、アリ番人ヲ付ケテ一同寢ニ
就ク蓋彼ハ火酒ヲ飲ミ大醉ニ加フルニ「ホイラ」ノ側ノ室

ナレハ熱氣強キ為ノ逐上シタル結果此狂体ヲ露ハセシモ
ノト覺ユ翌日ヨリ謹慎申付室外ニ出テシメサリシナリ
同廿七日秘魯國カイヤ才港ニ着ス横濱ヲ出帆セシヨリ正
ニ五十六日目ナリ社負数名余等ヲ迎へ汽車ニテ里馬ニ入
ル馬車教台ニテウエルタノ本社ニ到ル門ニハ日秘ノ國旗
ヲ交叉シヘーレン、高橋兩氏ヲ始メ一同ニテ歡迎アリ宴ヲ
開キ愉快ヲ盡シ散會セシハ翌午前二時過キナリキ
雪をおろしあつさびれのねんね
今や涼しき心お路の國
壯遊萬里水雲兼到處風情信意占
消費六旬何所得淡調言語廿餘髯

(山田紙店製)

地ノ事情ヲモ探索シツ、アリシ扱不日皆登山ニ付坑夫等
ニ酒肴ヲ与ヘシ如又彼足田ナルモノ大醉ノ上乱暴ヲ始メ
役負之ヲ制止セントスレハ皆々手ニ應シテ投ケラレ田島
技師ハ足ニ負傷シ歩相叶ハス床ニ就ク等ノ珍事アリ最
後ニ余漸ク彼ヲ組ミ伏セ醉ノ醒ムル迄縛シメ置キタリ然
ルニ田島負傷ノ為メ登山相叶ハス然レハ當分山ニテ一同
ヲ統御スル人ヲ欠クト云フ事ニテ余ニ其任ニ當ラン事ヲ
相談アリ余ハ別ニ貯存モナケレハ其任ニ就キタリ依テ高
橋委員長ヨリ左ノ達ヲ受ク

年俸貳百磅給與鑛山へ詰メ高橋ベールレン兩人ヲ代表シ
總轄トナリ諸事圓滑ニ取計ラヒ申スヘキ事

二月八日役名ヲ諸務課長ト達シアリタリ

(山田紙店製)

同十二日高橋委員長番頭ピエドラ簿記方バソングリオ山
口諸務課長小池技手坑夫大工手傳人夫等惣勢十四人午前
七時三十分ノ汽車ニテ登山シ午後三時十七分マツカナニ
着シ余等ハマツカナホテルニ坑夫等ハホテルシーコロ
ニ宿ス同十三日午前八時四十三分サンボテヒソニ着ス
此如鐵橋陥落ノ為ノ板ノ釣台又ハ函ニテ三四人宛ヲ集セ
蒸氣カニテ鐵線ヲ傳送ス下ハ數十丈ノ谷川危険言語ニ絶
ス午前十時サンマテオニ着シ鑛坑等ヲ見テ茲ニ一泊ス同
十四日正午サンマテオヲ發シ午後一時クハラニ宿ス但シ
汽車ハ之マテニテ止ル同十五日滞在此地四十日未今日始
メテノ好天氣ナリト云フ此辺ハ常ニ午前晴レ午後ハ必ス
雨アリト同行何レモ多少ノ病氣ヲ感ス余獨健ナリ同十六

日午前十時十五分一同登山セントス余曰ク余ハ徒歩ニテ
行ク余ニ従ハシモノハ来レト先ツ發ス余ト共ニ来リシモ
ノハ皆血氣ノ勇ニテ急行ス余ハ亀ノ歩ニ倣ヒ徐々ト登ル
余ヲ越シテ先ニ行キタルモノハ往々途中ニ倒レ青ク成リ
テ居ル之皆空氣ノ薄ラキタルニ因ル余ハ嘗テ富士山ニ登
リ工夫シタルコトアリ口ニ手ヲ當テ自分ノ息ヲ大切ニシテ
蓄ヘ行キケレハ遂ニ徒歩者中第一番ニカサバルカニ到着
ス勿論最初ヨリ馬ニテ行キシモノハ既ニ着馭シ居リケレ
ハ其馬ヲ交ル々々下シテ途中ニ倒レ居ルモノヲ運ヒ上ケ
タリ最ナル役負ノ分ハ北米人ジヨンソン氏ノ監督セル製
練所ニ其他ハホテルニ分宿セシム何レモ病氣ニテ苦情多
シ同十七日はヨリアンデス越ニ掛ル午前十時一同騎馬ニ

(山田紙店製)

膈

テ發ス余ハ高橋君ト之ニ殿タリ愈頂上ノ險岨ニ到リシ片
余ハ馬ノ腹帶ヲ檢スルニ慥ナリ礦山ヨリ出迎ヒタルカ
デナス氏先登ス余之ニ次キ高橋君最後ニアリ時ニ寒威凜
烈雪ニ交ユルニ震ヲ以テス急阪通路ヲ辨セス殆ト絶頂ニ
達セントスル片カーデナス氏ハ俄然馬ヲ止メテ余等ヲ下
瞰ス余亦已ヲ得ス馬ヲ止ムル一刹那余カ鞍迂リ下ル事一
尺斗リ確ト兩足ニテ馬腹ヲ締メ飛ヒ下リントスレモ急阪
ナレハ地上ニ達スルニハ二三間ノ下ニ落チネハナラス進
退維谷マリ間違ハ馬ト共ニ深谷ニ轉ヒ落チンノミ寧ロ兩角
ヲ蹴込ミ逸散ニ山頂ニ飛ヒ上ラント試ムルヤ鞍ハ丸テス
ツボリ抜ケタレハ余ハ教間ノ下ナル岩石ノ上ニ仰向ケニ
投ケラレ同時ニ馬ハ鞍及腹帶ニ後足ヲ括ラレ驅ク上ラン

ト焦レ氏能ハスバタ々々ト後去リシツツ遂ニ余カ胸上ニ
大轡ヲドシント落シ左ニ轉倒シテ高橋君ヲ馬ト共ニ追倒
シ又左ニ轉シテ忽チ千夫ノ谷ニ墜落ス時ニ余ハ後腦ヲ石
ニテ打チ肋骨ハ碎ケシカト思フ程痛ミ気モ殆ント失ヒタ
ル有様ナリシカ馬ノ最後ヲ見届ケ度ク逋ヒ出シテ深谷ニ
臨ミ見レハ馬ハ七轉八倒シテ岩石ノ上ヲ轉ヒ落チ遂ニ大
岩ノ間ニ首ヲ衝キ込ミ倒ニナリテ後足ヲ振り廻シテ苦ミ
居ル様實ニ愍然ノ極ミテアツタ

決其子知り約の谷底

いふふく声に哀れありり

然ルニ一方高橋君ハ馬ト共ニ轉展シテ外套及合羽ニグル
グル捲レタル大體ヲ漸ク跳ネ起キ余ニ向テドウダ山口死

(山田紙店製)

ンガカト余聲ニ應シテ曰ク否死ハセヌト漸クニ答フ因ニ
記ス余カ乗馬ハアラビヤ種ニシテ下腹極メテ細キ故斯ル
急阪ヲ上ルニハ胸鞅ナシニハ無理ナリト信ス又鞍カ抜ケ
タル時角ヲ蹴込ミタルハ嘗テ聞キ居タル故智ニ倣ヒシナ
リ夫ハ或馬術師カ吉原ノ鐵漿溝ヲ馬ニテ飛ヒ越ヘントシ
テ兩後足溝中ニ落込ミ進退谷マリタル片其人ノ頓智ニテ
兩角ヲ強ク蹴テ一目散ニ飛ヒ上リタル事アリシトナリ
叔命ニ別条ハ無キモノノ身体ノ苦痛甚敷去リトテ二万尺
ノ絶頂風雪ノ中如何トモ致シ方ナク只管高橋君ノ保護ヲ
受ケ居ル内余等ノ災禍ヲ知ラス一鞭當テ、飛去リタルカ
一デナス氏ハ余等カ来ラサルヲ怪シミ馬ヲ返シ来リタル
氏彼英語ヲ解セス只管心配スルノミ余ハ我カ馬ヲ引上ク

ルニハ一二里迂廻セサレハ連モ連レ来ル事叶ハシト思ヒ
居リシニ彼ハ其峻阪ヲ物トモセス直ニ長鞭ヲ揮テ血ヲ
ケノ馬ヲ追上ケ来リタルニハ實ニ感歎セリ然シテ彼ハ余
ニ再ビ其馬ニ乗レト勸ム余之ヲ辞退シ夫ヲカレデナス氏
ニ讓リ山阪ニ適セル高橋君ノムヲヲ借リ高橋君ハカレテ
ナス氏ノ馬ニ乘リテ發スカレデナス氏ハ現大統領カ智里
軍ヲ追拂テ里馬ヲ恢復シタル片ノ傳令使ヲ勤メタル程ノ
人ニテ馬術ノ名人ナルト比類ナケレハ如何ナル險山モ平
地ヲ行クカ如ク疾ニ驅テ去テ其影ヲ見ス余高橋君ニ尾シ
テ辿リ行ケハ數十丁程ノ急阪ヲ横切ラサルヲ得ス然ルニ
雪霽ニテ路ハ埋レ居ルノミナラス必迂ルニ相違ナイ命ア
リテノ事ナレハ此危險ヲ侵スヘカラス依テ余一策ヲ建テ

先ツ馬ヲ放チ渡ラシメ我等ハ之ニ次カント高橋君之ニ同
意シ即今斯シテ無事ニ渡ル事ヲ得タリ是ヨリ目指スヤウ
リ村マテハ約七八里アリト云フカレデナス氏ハ見エス高
橋君モ大分遠方ニ驅ケ去リ余心細クモ片手ニ痛ミ所ヲ押
へ片手ニ手綱ヲ取り途モナク家モナキ山中ヲポツ々々行
キ晩景ニ漸クヤウリニ入ル醫師社負等余ヲ途ニ迎ヒテ應
急手當ヲ受ケ床ニ就ク

同十九日余及病夫二人残り餘ハ追々カラワクラ
同廿一日余傷所ヲ耐ヘテ馬ニテカラワクラニ行キ卧床
ス同廿四日左ノ連シヲ發ス

一明廿五日當礦山開坑着手候様里馬府本社ヨリ達有之候
条此段及御通知候也

明治二十三年二月廿四日

カラワクラ礦山事務所

山口 慎

カーデナス

技師 田島晴雄殿

鑛山掛 小池政吉殿

追テ就業時間ハ凡一週間内ハ適宜取計可
然旨通達有之矣ニ付此段申添矣也

第 告 示

一 酒 類、砂 糖、蠟 燭、

右者給与食料外ニテ惣テ自便タルヘキ事

日 日

右 兩 名

(山田紙店製)

鑛夫等一同へ

同廿五日開坑式左之通

一 サンプルランシスコ坑口ニ日秘兩國ノ國旗ヲ交叉シ其前
ニ机ヲ置キ 大山低命正一位稻荷大明神嘉良和久良山神
ヲ安置シ鑛夫各試掘セル如ノ礦石及酒肴ヲ供ヘ高橋委員
長ヲ始メ役員一同列座兩國鑛夫及雇人皆倍席シ先ツ神酒
一杯宛ヲ頂キ次ニ酒宴ヲ始ム遂ニ歌舞ニ及ンテ一同解散
ス拝觀人堵ノ如シ同廿六日高橋君ハ北米人カイヤードビ
エドラ・バソングブリオ及小池等ヲ將井テビクトリヤノ製練
所敷地ヲ見聞ニ赴ク小池一人戻リ来リ他ハ皆帰途ニ就ケ
リ田島技師ニ早々登山ノ事ヲ申送ル同廿七日バソングブリ
オ氏帳面等ノ件ニ付ヤウリヨリ戻リ来ル高橋君ヨリ来状

明日ノ汽車ニテ里馬ニ行ク猶ヘトレシ氏田島技師等ト相
談ノ上製練所ノ場所ニ付報知致スベケレ共昨日見聞ノ場
所ハ至急測量致サレ度何レ田島ハ早々登山ノ事ニ取計ヒ
申スヘクニ付惣テ不都合之ナキ様注意之アリ度云々小池
技手ハ礦夫六人土人一人ヲ引連レビクトリヤヘ測量ニ行
ク同廿八日バソングリオ今朝里馬ヘ歸リ凡一ヶ月内ニ帳
簿ヲ送ルニ付夫レマテハ報告ニ及ハスト云フ小池本日モ
ビクトリヤヘ測量ニ行キ結了セリ

三月一日書記アルベルト齒痛ニテ欠勤ス同二日通辨屋須
氏氣候ニ堪ヘ難キ^趣付^シ辞任申出デタルニ付里馬本社ヘ進
達ス因ニ記ス余ト屋須トノ室ハ相隣リテ居所ノ構造ハ
人エヲ用ヒザル石ヲ積ミ上ケ墜ト為シ其凹凸ヲ覆フ為ノ

(山田紙店製)

寒冷紗ヲ下ケ屋根ハ只亜鉛板ノミニテ葺ケリ而シテ之レ
ニ寢名ヲ置ク余ノ負傷未タ全治セズ卧床ニ居レリ或夜半
過キ人アリ戸ヲ排シテ静ニ入り来リ悲シキ聲ニテ余ニ請
フ事アルモノ、如シ眼ヲ閉ケハ頭部ヲ白布ニ包ミ殆ント
幽靈ノ如シ薄明リニテ透シミルニ完ク屋須ニ相違ナシ何
事ナラント問ヘハ彼レ慄ヘ聲ニテ言ヘケルニハ山口サン
私ニハ連モ此ニハ耐ヘ切レマセン雪カ隙間カラ舞ヘ込ミ
マスカラ上ヘ布ヲ釣ツテ寢マシタカ矢張吹込ミマシテ之
此通リト兩袂ヲ見セテ泣キツ、今日モ此上ノ岩穴ニ行テ
見マシタカ^ト戦争當時ノ髑髏カ未有マス若私カ此ニテ死セ
ハ矢張彼ノ通リト思ヘハ實ニ情ナクナリマシタ就テハ何
卒御殿ヲ願テ歸リ度フ存シマス云々ト余ハ其未練サ加減

ニ驚キ斯様ノ人間ハ連モ役ニ立タヌモト諦メタリキ

わの庵高きよりたのきかきくら黄金必銀つぎせぬの山

醉餘歩月路三义喜見巖頭雪色加

誰識山家寒食裏滿庭一白尽瓊花

同三日カレデナス氏帰山ス同四日出人四人雇入ル同五日
小池枝手ヨリ第二號願書提出ス製練所新築地及用水路測
量相濟矣ニ付直ニ坑夫飯場并ニ事務所ノ敷地測量ニ取掛
リ度矣間至急地所示シヒ下度云々本日限り青木惣助ノ小
頭代理ヲ解ク同六日カレデナス氏リヨウマ子スニテ難儀
致矣ニ付寢台ニテヤウリへ送ル同七日小池風邪ニテ欠勤
ス同人ヨリ礦夫部屋へ尤ノ通り張出シヲ為ス旨届出ル

定

(山田紙店製)

第一條 職工就業時間ヲ定ムル事左ノ如シ

第一項坑夫就業時間ハ之ヲ交代ニ為シ其區別左ノ如シ

一番自午前八時至午後四時 二番自午後四時至同十

二時三番自午後十二時至翌午前八時

第二項坑内雜夫ノ就業時間ヲ自午前八時至午後四時ヲ

一人トス

第二條 坑外職工ハ自午前七時至午後六時ヲ一人トス

但休息時間ハ午前九時ニ二十五分正午ニ廿分

間午後三時ニ廿五分間

第三條 禁示

諸職工ニ於テ食事外ニ食堂ニ至リ猥リニ飲食スル事

ヲ禁ス

火藥其他破裂質ノ物品ヲ携帶シ食堂又ハ鍛冶工場ニ
至ル事ヲ禁ス

但此規則ニ違背シ破裂ヲ起シ疾病ヲ醸ス者ハ公病
ニ取扱ハサルル心得フヘシ

右之通相違候也

明治廿三年三月 秘魯鑛山鑛業掛 小池政吉

同八月小池出勤ス同九月小池アルベルト兩人カーデナス
氏ヲヤウリニ見舞フ余ハ未ダ全快セサル為メ同行スル事
ヲ得ス同十月第三號狀ヲ高橋委員長ニ送りカーデナス病
氣下山ニ付田島ノ登山ヲ促ス同十一月アルベルトヤウリ
ヨリ金貨受取り来リ諸支拂ヲ為ス同日余治療ノ為メ小池
トヤウリ田甫ニアル温泉ニ行ク獨リ別レテヤウリニ至リ

(山田紙店製)

セーゴレニ、ホテルニ宿シドクトル、ワレニチーント會談ス
同十二日小頭吉田来リ又温泉ニ入り帰山ス同日高橋委員
長へ第四号狀ヲ送り田島ノ登山ヲ促ス同十三日早起温泉
ノ効能カ甚快癒ヲ覺ユ青木惣助病氣ニ付馬ヲ以テ醫師ヲ
ヤウリニ迎フ同十四日ドクトル、ワレチーン来ル同十五日
桑港領事館員早川三宅兩氏へ宛出便此度礦夫百五十人日
本ヨリ呼寄せ美答ニ付貴地へ来リ美節ハリチヤルドソン
氏ニ頼ミ船賃ノ割引ヲ御取計ヒヒ下度云々同十六日小池
枝手ヨリ乙二号ヲ以テ坑夫病氣ニテ引キ美分ノ食料ヲ差
引云々申出ル同十七日日本ヨリ坑夫一同八時間労働ノ事
ニ定ム同十八日高橋君ヨリ十四日付用狀入手ノンデサー
ブル氏来ラハ厚遇ノ事田島カーデナスモ二週間モ経美ハ

バ全快ナラン當方頗ル宜キ都合ニ成リタリ云々申来ル同
日高橋君へ返書ニ小池ノ測量出来上リ坑内へ廻ル坑丈ハ
時間究働ク坑内用木長五ノートル末口六寸ヨリ八寸マデ
取交セ百本「ロップ」ハ分ノ品三百尺注文ス因ミニ記ス其後
見本来ル五ノートル材尅本代價二十ソールス(我二十圓十
リ)ノ高價ニ付到底使用ノ見込ナシ別紙ニ去就ヲ共ニスへ
キニ付堅忍不拔成功ヲ頼ムト申送ル

里馬ある久万氏ニ答ふ

心報のむさく時をまて馬をいし独りくおしとふきの病

同十九日日本各所へ出便不同二十日一週一回里馬へ鐵道
通ル事トナレリバンソングリオヨリ「インボイス」来去ニ付刊
クラへ向ケ物品ノ早速ヲ促ス

當カラワクラ鑛山ノ生活情況

抑此鑛坑ハ一万八千尺ノ高所ニアリ言迄モナク氣薄ニシ
テ不慣ノ者ハ呼吸困難ナリ山ヲ下ルニハ何氏ナケレモ若
シ山へ上ル片ハ腹膜鼓動シテ呼吸容易ナラス尤騎馬ナレ
ハ左程苦シカラス茲ニ来リテヨリ余カ如キ健康體ニシテ
且血色好キモノモ皮膚泥色ヲ呈シ血管沈着自ラ氣血ノ循
環悪敷シ徒テ氣力モ消沈スルハ自然ノ結果ナリ住所ハ前
ニ述べタル通り我室杯ハ先上等ノモノ其他ハ僅ニ風雨ヲ
蔽フマテノモノナリ飲食物ハ惣テ里馬ヨリ鐵道及馬背等
ニ依リ送り越スモノナルカ故ニ油断スルト絶食ノ難ニ罹
ル事アリ米ハ元ヨリ粗糲ノモノ肉菜ハ山ノ苦塩ヲ以テ之
ヲ煮ルカ故ニ實ニ不味ナリ水ハ深谷ノ細流ヲ小桶ニテ土

(山田紙店製)

人終日少シツ、擔キ上ルナリ燃料ハ不毛岩石山ナレハ彼
深谷ニ薄ク生ヘタル苔ヲ土ト共ニ取り天日ニ乾シ置キテ
用ユ去リナカラ氣薄故ニ何遍「マツ」子ニテ付クルモ付カス
已ラ得ス石油ヲ灌キテ漸ク焚キ半熟ノ者ヲ食ス扱又其石
油ノ高價ナル驚クニ堪ヘタリ或時ハ一罐九ツーレス半ニ
テ漸クヤウリヨリ分ケ貰ヒシ事アリタリ衣食住ノ困難ナ
ル事概ネ此ノ如シ

同廿一日ルーカスヲシテオロヤヘ馬足ヲ交換ニ行カシム
小池ノ用水路測量圖成ル又坑内測量及分析ヲ急カシム
先坑内ヲ測量セント小池ハ午後ヨリサンフランシスコ坑
ニ入ル最早日暮ニナルモ帰り来ラズ坑夫ヲ尋ネニ入レタ
レ氏大ナル水溜リ等アリテ何レヘ行カレタルカ相分ラズ

ト空敷ク帰り来ル余ハ甚心痛ナレ氏如何ヒセン方ナク彼
是評議ヲ凝ラシ居ルト漸ク夜十時頃ニ噫腹カ減ツタト歸
リ来レリ如何セシカト問ヘハ彼曰ク此山ニハ寶ニ驚ヘタ
坑内ハ丸デガランドウニテ「ウヅ」アルノミ又所々ニ水溜
リアリ縦横ニ巡迴中遂ニ道ヲ失ヒ出ル事能ハス漸クノ事
ニテ薄明ルキ坑口ニ行キ合ヒタレハ先宜シカツタト出テ
見レハ豈計ランヤ我山ニアラデ隣山ノ坑口ニ出テタルモ
ノナリ先命拾ヒシタト食事ヲ濟マセ寢ニ就ケリ
斯ル意想外ノ山ニテハ一刻モ油断ハナラスト翌日ヨリ急
キ分析ニ掛ラシム坑分析ノ結果甚思ハシカラス茲ニ益疑
念ヲ起ス小池ニ注意シ分析ノ間違ニアラスヤト依テ各所
ノ見本ヲ取り何遍トナク試験シ三日間晝夜兼行ニテ充分

ノ成績ヲ舉ケタル結果尅千分ノ尅半乃至貳ニシテ最初日
本ニテ分析シタル百分ノ廿七乃至廿八ニ比スレハ雲泥ノ
差ナル事ヲ發見シ且驚キ且悲シ此ノ如キ少量ノ股分ハ教
百年来掘出シテ坑外ニ山ヲ為シ遺棄シアルモノト區別ナ
シ是決シテ利益ヲ見ルベカラサル老衰坑ノミト小池ト相
對シテ歎息之ヲ久ラス此實驗ニ依レハ最早寸時モ黙過ス
ヘキニアラス充分ノ意見ヲ述ヘテ高橋委負長ノ反省ヲ求
メサルヘカラスト分析ノ事實ニ依リ意見書ヲ作り見本一
切ヲ添ヘ小池技手ノ病氣下山ヲ機トシテ之ヲ高橋委負長
ニ提出セシム茲ニ於テ余ハ斯業ノ見込ナキヲ悟リ独リ心
ニ決スル知アリ自ラ警戒シテ惣テ記帳ヲ廢シ只記帳ニ留
ムル事トセリ且此礦山ノ如ク相違セルハ必何カ曲事

カ有ル事ト大ニ其真相ヲ探知スル事ニ努メタリ小池ノ下
山ト行違ヒニ高橋君ヨリ来狀ノ未ニ

(山田紙店製)

あんてすの山のふ雪ふみわけて (後を付けよとありけれ)

まろひ甲斐阿るいすはーもの那(な)をけぬ

東京ある母より新写紙并水天宮の神符を

送す越されけれいたごちよ返歌しぬ

たらちねの親の恵みの心守り悔き山まふ小肌守

又たし二首をも添く送りぬ

新河ふれ書ある雪夕ふ秋の心を照らす影

信濃ふる雪ふる心の池しつ昔をふかす山

同廿六日土人坑夫頭カマチヨウヨリ日本坑夫等畏リニ家
材并ニ坑内用材木ヲ使用スル旨訴へ出ル小池へ出便御知

へ来リシ時無聊ノ餘リ牛ノ骨ヲ彼ノ前ニ投ケ出シ之ヲ食
 へト云へリローカハ何トカ破レ英語ヲ速へケレハ田口ハ
 已レニハ解リモセヌノニ何生意氣ナ多勢ヲ頼ミテ威張り
 上ルトローカカ言へシトテ直ニ飛出シ投ケ倒シ逃ケルヲ
 追フテ彼ノ室ニ押込ミ小刀ヲ以テ其腹ヲ指シ猶手ヲ返
 シテ頭ヲ衝キシニ「ハツ」トヲ冠リ居リシ為ノ刃折レテ疵付
 カス同時ニ日本坑夫等皆加勢ニ行キ一人ノローカヲ非常
 ニ打擲シケレハ彼ハ九死ニ一生ヲ得テ山ヲ逃ケ下リ坑夫
 頭カマ子ヨウニ訴へタリ依テ彼等ノ激昂一方ナラス礦山
 局へ訴へ損害ノ弁償ヲ要求スヘシト云フ同時ニ山ニテハ
 我坑夫等ハ土人等カ大舉シテ返報ニ来ラント岩石ヲ所々
 ニ積ミ上ケ若攻ノ登ラハ打子碎カント之ニ備フルヲ嚴ナ

(山田紙店製)

リ山上山下ニ三丁ヲ隔テ、龍虎相撃ノ形勢却々凄シキ
 ヲナリキ當時カ「デナス」及小池モ不在ニ付其裁判ハ一ニ
 余ノ責任ニ歸セリ依テ余ハ各役負ノ前へローカヲ呼ヒ出
 シ如何ナル間違ニテ斯ル事ノ起リシカ公平ニ裁判スルニ
 付決シテ騒ク事ナカレト先以テ應急手當ヲ加へテ醫師ヲ
 ヤウリヨリ呼寄セ治療セシメ一方又山へ登リ我坑夫等ヲ
 取鎮メント小屋ニ至レハ彼田口ハ足ヲ鐵砲ニテ打タレタ
 リト訴フ見レハ「ピストル」ニテ腔ヲ打貫ケリ之又醫師ノ手
 當ヲ頼ミ嚴重ニ其負傷ノ事情ヲ究問スレハ何ソ計ラン彼
 ハ兼テ禁シ置キタルニモ拘ハラズ何時ノ間ニカ自ラ置
 置キタル「ピストル」ヲ以テ更ニローカヲ打タント彈藥ヲ込
 メ試ミ居ル機ニニ發火シテ自ラ其足ヲ打貫キシ事判明セ

リ當時醫師ノ鑑定ニ依レハ是レ他ヨリ来リタル玉ニアラ
ス如何トナレハ田口ノ「ツボン」ニ打入りタル知魚々居リシ
ヲ見レハ遠方ヨリ来リタルモノニアラスト夫レニ付其醫
師ノ兄弟カ少年ノ時人ヲ疵ケ其申訳ニ彼先我ヲ疵ケタル
ニ依リ我モ亦彼ニ報セリトノ言訳ノ為ノニ自ラ其身ヲ小
刀ニテ疵ケシ事機械上ヨリ其偽リ事カ露レタトテ一笑ニ
附シタリ然ルニローカハ夕刻ニ到リ治療并ニ礦山局ニ訴
ヘルトノ事ニテヤウリニ去ラントス余金ヲ与ヘ慰諭シテ
行カシム同夜高橋委員長ヨリ相談ノ件アレハ至急下山セ
ヨト申来リケレハ三月末迄ノ勘定ヲ屋須ニ其外ノ諸務ヲ
アルバルトニ托ス

同日余將ニ下山セントス然ルニ誰モ余カ本社ノ命ニ應

(山田紙店製)

シテ下山スルトハ信セス昨日ノ出来事ニ付恐レテ遁ルハ
カ或ハ又如何ナル處置ヲ為ス積リカ杯ト疑議百端ノ形勢
ニ付余ハ既ニ馬ニ騎リタレ氏一同ニ向ヒ声言シテ曰ク余
ハ皆々カ心配スル様ノ義ニテ下山スルモノニアラス又皆
々ヲ棄テ去ル者ニモアラス實ハ昨日日本社ヨリノ命令ニテ
至急下山セヨト云フ矢先ハ昨日ノ起リ事カアリシ為ノ替
ニハ彼是疑ヲ起シタルモ無理ナラ又次第ナルカ今申ス通
リ命ニ依リテ下山スル事ニ相成リ居リ矣次第ナリ尤此等
關ノ事ハ本社へ届ケ出テ公平ノ處置ヲ取ルヘキニ付一同
モ安心シテ業務ニ従事セラレタシトテ馬ニ鞭打チカラワ
クラ礦山ヲ發ス時ニ午前八時ナリ同行ハ本社ノ小使ル
カス(元陸軍中尉)馬鹿足ヲ曳カシム是ハチクラニ首メ置キ

田島ノ登山ニ便スル為ナリカサバルカニテ晝飯シ午後四時チクラニ着シ例ノ「ホテル」ニ宿ス亭主余ニ密告シテ曰ク先般貴下一行カ登山ノ片見ラレタルサンマテオノ礦山ヲピエドラ氏カ約束シ悉皆ニテ二千五百ソールスナルヲ只亮千ソールス与ヘタルノミナリ而シテ其金ヲ拙者ニ托セリ蓋之ハ他日ノ用意ノ為ナラント但シ此取計ラヒハピエドラカ自分ノ利ヲ計ル毒策ニ出テタルモノト彼ハ思ヘルモノ、如シ余ハ其真偽ヲ知ラス只聞キ置キタリ同「ホテル」ニテ右ノ礦山主モンテス氏ニモ會談セリ本日途中ニテ田島ノ登山スルニ逢フテ委細ニ善後策ヲ託ス

同五日土曜日午前七時チクラヲ發シ午後五時里馬ニ着スヘーレン氏ノ名代ピエドラ其他カーデナス小池等皆余ヲ

停車場ニ迎フ、以テ立派高懸馬

同六日高橋委員長ニ余カ獨断ニテ小池ヲ下山セシメ書面ヲ托シ意見ヲ述ヘタル事ヲ再演シ又之ニ對シテヘーレン氏カ立腹シタル事委員長カ表面ハ善後策ヲ取り内實放棄ノ事ニ決シタル等委細ノ事ヲ聞キ將來ノ手續杯秘密ノ約ヲ為セリ

同八日高橋君十日出立廿日パナマ發ト田島へ案内シ又屋須ヘモ種々懇ニ傳言ヲ頼ミ愚ニ角余カ登山マデハ下山セズニ待チ居レト云フ意ナリ是ハ田島カ自己ノ勝手計リヲ為シ配下ノ者共始終騷擾ノミ起シ居ル故屋須カ堪ヘ兼ネ煩悶セルニ依テノ足止メノ頼ミ状ナリ

同九日ヘーレン氏ヨリ高橋君ト共ニ來訪セラレタシト電

話来リ美ニ付兩人伴氏ヲ連レ共ニ行クヘーレン氏曰ク高橋君歸國中ハ山口君ヲシテ代理トセラレタシト提言ス高橋君ハ左様ノ権限ハ与ヘ難シト云フ余亦仮令命セラル、共應セサル決心ナリシカハ事遂ニ止ム高橋君トバンク、ロンドンレスヘ行キ頭取ウエールス氏ニ面會シ金貨ノ事ヲ談ス當日カーデナス歸山ス停車場ニ送ル同十日高橋委員長歸朝ノ途ニ就クカイヤオ港マテヘーレン氏ヲ始メ社負一同見送ルサンタローサ号ニテ出帆ス風来ボーイ岡山ナルモノ之ニ從テ行ク(紀州人ト云)但パナマヨリ歸ル約束ナリ此行相方ノ意中不快ナルモノ有ルカ如ク他見ニマテ推察セラレタリキ

加比亞遠港別高橋君

海門分手暗銷魂心事自今誰与論
歸去来兮安嶺窟艱難玉汝亦天恩

同十一日ヘーレン氏ヨリ來訪ヲ乞フ伴ト共ニ行クヘーレン氏曰ク昨日高橋サンノ出帆ノ際ニ於ケル様子ハ甚其意ヲ得サル如アリ何カ腹ニ思フ事共アリシナランカ貴下ハ如何感シラレシヤト不快ノ内ニ怒氣ヲ含ンテ問ヲ發セリ余ハ勿論左アルヘキ事トハ知リナカラ淡然トシテ答テ曰クナニ左様ナ事ハ有リマスマイ私ハ彼ノ人ニ長ク交リテ居リマスが彼ハアト云フ風ノ人デスヨ何モ御氣ニ留メラルル事ハ御座ヘマスマイト微笑シケレハ氏ハ左右デシヨウカ左右ナレバ善イケレ氏何ダカ何ヲ言フテモ一向打解テ答モセスニ行カレタカラ私ハ甚面白クナカツ貴

下カ左様ノ御考ヘナレハ私モ安心シマシタト打解ケタル
様子ナリキ因ニ記ス昨日伴ヨリヘーレン氏ニ高橋君出立
ノ電信ヲ出サン事ヲ請ヘシニ同氏曰ク山口サン金カアリ
マセウ御出シナスツタラ宜カロウト云ヘシト然ニ今朝ヘ
ーレン氏ト前件問答ノ結果彼ノ疑團ハ氷解セシモト見
ヘ同氏カ右電報料ヲ出スト申出テタリ

同十二日十三日十四日里馬滞在同十五日日曜ヘーレン氏
ヨリ受取ルヘキ金七百五拾磅ノ内百磅ヲ受取ル坎金六百
九拾ソーレス五拾五センタボナリ同日カラワクラ鑛山ヨ
リ飛報アリ曰ク我坑夫等一同ヤウリノ鑛山局ヘ押寄せ大
騷擾ヲ起シ美ニ付余ニ大至急登山セヨトノ事ナリ同十六
日余小池技手及通辯大関正之助ヲ徒ヒ午前七時半ノ汽車

(山田紙店製)

ニテ登山ス午後七時チクラニ着シホテルトラサンジニ
宿ス坎時田島及カーデナス両氏宛ノヘーレン氏ノ書状ヲ
持参ス因ニ記ス右大関ハ元来ヘーレン氏方ニ雇ハレ居ル
モノナレ氏伴等ノ如ク秘密ニ預ラサリシモノナリ余ハ鑛
山ノ被ブセモノタリシ原因ヲ探知セント尔来苦心セルモ
其術ナク困リ居リシカ幸坎ヤウリ騷動ニハ是非共スバニ
シ詰ヲ圓滑ニ話シ得ルモノニアラサレハ正理モ非理ニ陷
タル次第ナリ然シテ坎大関コソハ余ニ惣テノ事情ヲ話シ
クレ又ヘーレン氏ヨリ受取ルヘキ金負ノ請求方ニ付テモ
非常ノ便宜ヲ得タル唯一ノ親友ナリキ同十七日乗馬迎ヒ
ニ来ラザル為メ不得已チクラニ滞在同十八日別ニ馬ヲ

雇へ午前八時チクヲ發ス小池ハ直ニカラワクラ鑛山ニ
行キ余ハ大関ヲ從ヒヤウリニ行キ直ニ鑛山局長ブラボー
氏ニ面會ス氏曰該事件ハ言語不通ノ誤解ヨリ起リタル事
ニテ相方了解セシニ付一同既ニ歸山セシノタリト余其好
意ヲ謝シテ別ル抑此騷動ハ何モ根モ葉モナキ事ナリシガ
何カ屋須カ通辯ノ相違ヨリ一同ハ鑛山局長カ彼等ヲ欺キ
タリトノ事ニテ大ニ憤慨シ各石ヲ投シテ鑛山局ニ手向ヒ
タル為ノ局長ヲ始メ局員ハ已ヲ得ス應急防禦トシテ小銃
ヲ向ケルト同時ニ村中ニ通知シ鐘ヲ乱打シ村中惣出トナ
リテ日本人ヲ盡ク捕縛入牢セシメタル珍事ナリキ
同十九日カラワクラナル田島ヨリ申越スニハ是ヨリ馬ヲ
廻スヨリモ一度歸山シテ當所ヨリチクヲ行ク方順道ナ

(山田紙店製)

レハ右様致サレタシトノ事ニ付大関ト午後四時歸山シ
翌午前三時マテ諸勘定ヲ整理ス

葉根たぐ賊か岩屋乃夕煙

亦かくも旅の阿われおそひく

同廿日小池枝手田島技師トノ折合甚悪敷類リニ煩悶スル
ニ付會社ノ為ヲ思ヒ當分ノ知充分忍耐勉強セヨト説諭ス
同廿一日日曜小池及談ヒストル頁傷ノ坑夫田口ヲ里馬ニ
下山セシム此時本社へ注意シテ小池ニハ既ニ小遣錢ヲ渡
シ置キ矣ニ付是ヨリ沙汰スルマテハ決テ金錢ヲ渡スベカ
ラスト申送ル同廿二日

漂泊天涯似断蓬自知性癖苦斯躬
可憐安鐵山頭夢多在寒濤苦雪中

世塵寧足汚丹心、俠骨猶任霜雪侵
只有家鄉老親在、春風四月淚霑襟

同廿三日在日本高橋委員長へ今日迄ノ事一切申送り自宅
へモ事ニ依ルト帰朝スルヤモ計リ難キニ付自今出便セ又
様申送ル又本社へ坑夫乱暴ニ付テノ罰金ハ無論彼等ニ科
スル積リナレモ他ノ六十ソールスハヘーレン氏ノ雇人ナ
レハ雜費ヨリ仕拂フヲ至當ト存ス大関ハ用濟次第歸スヘ
シ小池ノ一身ハヘーレン氏ノ指揮ニ任セ申スヘクモ同人
カ隨意ノ下宿料ハ出シ兼キモニ付此旨御通シ下サレ度ト
申送ル同廿四日廿五日小池へ出便金錢ヲ坑夫ヨリ借入矣
由聞及ヘリ此際使用ヲ謹ミカイヤオ等へ出保養ハ無用ト
注意ス本日坑夫喧嘩一件ヲ一切取調べ同廿六日廿七日鑛

山局長ブラボー及サンタマリヤ氏来ル晝飯ヲ饗シカーデ
ナス彼等ヲヤウリニ送ル同廿八日廿九日卅日日曜ヘーレ
ン伴両氏へ出便坑夫喧嘩ノ一件書類ヲ送り罰金三十ソ
レハ是非彼等ヨリ出サセテ得共其他ハ情實ヲ計リ然ル
ヘク指令ヲ頼ムト申送ル

山居書感

今日尚もまよふ事なきを待つオニテ言ハシキ心他ニテ此れ
々々亦阿ふれふ事故に乃わらむ友とちや集むくむと世

五月一日坑夫等ノ勘定ヲ四月マテニ切上テ取調ヘカーデ
ナスヨリ其金額ヲ受取ル同二日カーデナスカマチヨウト
炭山ヲ検査ニ行ク坑夫等へ四月分ノ勘定ヲ為ス同三日田
島ヨリヘーレン氏ノ書状ヲ示サレ日本ヨリノ電信ニ株金

募集不可能一同引揚ケヨトノ意味ナリ

因ニ記ス此電報ハ即チ高橋君出帆前余ト牒シ合セ此事業ハ断然放棄スルモ正面ハ猶資本ヲ増募シテ大仕掛ニスルト云フ事ニテ帰朝セル次第ナルカ帰リ早々出来ヌト言ヒテハ面白カラサルニ付看後凡一ヶ月半ヲ過キテ不可能ノ電報ヲ發ストノ約ニ基クモノナリ高橋君カニヶ月ニ至ンタル長旅ヲ経テ帰朝ノ上更ニ一ヶ月半ヲ待タセラル、事實ニ長ク感シタルノミナラス其間山上山下田島技師ヲ始メ坑夫等ニ至ルマテ交ル々々喧嘩騒動ヲ遣ラレ只一人ニテ其始末ヲ為ルハ實ニ言語同断ノ境遇ナリキ

畢生志業百無功安鐵山中恨不窮

場斷寒燈々下夢一聲歸雁月朦朧

(山田紙店製)

必限の老さく時を待ちわかれ

さき小池へしも昔ありけり

本日ヘーレン氏ヨリ高橋氏トノ約條ノ書面ヲ送ルト申来ル同四日小池へ答書ニ金負云々ノ事氷解セリ當座預ケノ事伴ヘモ申送り置美ニ付充分勉強セヨト注意シ左ノ歌ヲ贈ル

忍まつの池のかもめの浮ぶせわ

忍か忍まはほめてに侍志禮

本日高橋君パナマヲ出帆ノ案内来ル同五日伴へ出便小池ノ事ハ宜ク頼ム同人ト田島トノ金負ノ事ハ當分貴説通りノ事鑛夫喧嘩ノ事ハ郵便行遣ヒニ付猶御一覽ノ上御指示ヲ乞フ鑛夫食料ノ事ハ是迄モ心配セシカ仕段ナシ猶考フ

ヘシ云々同六日高橋君へ昨日迄ノ事一切申送り故郷ノ友
達等へ詩歌教首ヲ送ル本日カーデナス氏誕生日ニ付田島
大関トヤウリニ招カレ行キ大馳走ニナリ夕刻エグレシヤ
氏モ同道帰山ス同七日同八日ヘーレン氏ヨリ田島へ宛日
本ヨリノ電信皆送り来ル見ルニ種々ノ事問合せ来リシモ
返事ノ仕方モナケレハ日本へ向ケ左ノ電報ヲ出シ吳美様
ヘーレン氏へ申送ル高橋ノ帰朝マテ中止結約セリ山ヨリ
ノ手紙直ニ着ク返事無由桑港川口源次郎氏へ豫テ頼ミ置
矣小使二人ノ事ニ付返書来ル然ルニ之ヨリノ断状ト行違
ヒニ来ルモノナリ同九日同十日エグレシヤ氏ヤウリニ行
ク余ハ病卧ス同十一日里馬ヨリ青木惣助大負傷ノ件申来
リ至急余カ下山ヲ促シ来ル同十二日病卧同十三日余病未

夕全快セサレ比青木ノ件心配ニ付不得已大関ヲ從ヒ午前
八時出立午後五時チクラニ宿ス同十四日午前七時チクラ
ヲ發シ午後五時里馬ニ着ス諸惣助ノ始末ヲ聞クニ去ル五
月七日惣助病氣大分快方ニ趣キタル折柄小使ペードロ、サ
バラナル者ノ周旋ニテ竊ニ酒ヲ買ヒ婦人ヲ社室ニ引入レ
大醉ノ上ペードロト喧嘩ヲ為シ遂ニ彼ヲ室外ニ追出シ夕
レバペードロハ外ヨリ戸ヲ締メ追フ事叶ハサルヲ怒リ硝
子戸ヲ破リ夫ヨリ短刀ヲ衝キ出シ振り廻シタル為ノ腕ハ
硝子ニテ切レ血ヲラケトナレリ其儘床ニ歸リ醉眠シ居夕
ルニ夜半ニ至リペードロニ欺キ誘ハレテ庭園ニ走り出テ
ケレハペードロハ物陰ニ待構ヘ小銃ニテ二發打チ掛ケ何
ヘカ脱走シタレハ何カハ以テ堪マルヘキ両腕及肋骨三枚

(山田紙店製)

ヲ打貫カレ驚キ引返シ已カ室ニ逃ケ込ント走り去リ已カ
室前ヲ行キ過キテ表門ノ戸ニ突キ當リテ仰向サマニ打チ
倒レ殆ント人事不省トナレリ其時社室ニ居合セタルモノ
ハ小池技手久万外三人ノ日本人ノミ伴ハ自宅ニ歸リタレ
ハ此騷キヲ同氏ニ報シ所置セント焦レ氏表門ノ鍵ハ元来
ペードロノ預リナレハ得ルニ由ナシ何レモ困却ノ折柄小
池ト庭師松本辰五郎ト塀ヲ越テ伴ノ宅ヲ尋ヌレ氏言語通
知サレハ人ニ聞ク事モ叶ハス漸ク松本ノ手傳人ノチヤ
ンチヤボノ家ヲ尋ネ夫レニ頼ミ伴ノ家ニ行キ夜明ケテ右
四人社へ歸リ来リタレ氏鍵ナケレハ矢張入ル事叶ハス依
テ無理ニ鍵ヲ振シ開ケ内ニ入ル是迄教時間負傷者ヲ看護
セルモノハ彼ビストル負傷者ノ田口病中ノ久万及大正北

川ノミニテ随分困リ居ル中右四人カ入り来リ共ニカヲ添
ヘテ寢台ニ負傷者ヲ棄セ室内ニ運ヒ込ミ一方又醫師ヲ頼
メ共容易ニ来リ呉レス遂ニ翌八日午前八時頃ニ至リ漸ク
醫師来リ先應急手當ヲ施シテ午後四時三十分頃慈惠病院
ニ送り込ム事ヲ得タル次第ナリト云而シテ右加害者パ
ドロ、サバラ土人ハ何レヘカ身ヲ匿シニケレハ余ハ頻ニ手
ヲ廻シテ遂ニ彼ヲ取押ヘタルモ彼ノ狡猾ナル忽チ巡查ニ
金ヲ掴マセテ途ヨリ脱走セリ斯ノ如クスル事兩回ニ及ヒ
遂ニ彼ヲ罰スル事能ハサリシハ遺憾ナリキ又彼国ノ巡查
カ二三圓ノ金ニ満足シテ已カ職責ヲ全フスル事ヲ得サル
ハ誠ニ憐ムヘキ墮落者ト言ハサルヲ得ス同十五日余日本
ヨリノ内報ヲ早ク得度幸病氣ニ付滞在致シタケレ氏へ

レン氏ハ山ニアル鑛夫等ノ事ヲ氣支ヘ更ニ余カ登山ヲ請
フ事急ナリ余ハ病ヲ以テ猶豫ヲ頼ミケレハヘーレン氏ハ
夫レヲ疑ヒ馬車ニテ余ヲ或醫師ニ同道シテ診察セシム醫
師ハ余カ身体ヲ懇ニ見テ曰フニハ八九日間當所ニテ治療
シ而ル後登山然ルヘシ大ニ心配シ又ハ大ナル運動ヲ為ス
勿レト水藥及發泡ヲ與フ同十六日在鑛山屋須ヘ余ノ里馬
ヘ安着及青木ノ件又鑛夫頭加藤及馬場ニ青木生命ニ案シ
ナシト申送ル同十七日青木ヲ病院ニ見舞フ同十八日越前
人勝村氏ト子ヨリヤス海水浴場ヲ一覽ス同十九日青木ヲ
見舞フ夜伴ノ宅ニ招カル同廿一日廿二日廿三日屋須ヘカ
ーデナスヨリ売千ソーレスホト受取ラスハ早々請求セヨ
ト申送ルヘーレン氏余ニ向ヒ山田技師日本ヲ出帆セリ就

(山田紙店製)

テハ田島ニ宛貴殿ヨリ下山ハ山田技師来ル迄見合スヘシ
ト云フニ通ノ書状ヲ日本宛出便セヨト申送り貫ヒタシト
依頼セラル同廿四日日本ヘ出便ヘーレン氏ハ山田技師出
帆ノ報ニ接シ満足シ居レリ拙者儀疵所寒氣ノ為ノカ甚悪
敷且少々脳痛ノ為ノ無擾里馬ヘ下リ治療中ナリ鑛夫等ハ
追々快方ニ付安心有之度旨申送ル同廿七日田島ヘ出便下
山ハ拙者帰山マテ御見合セ相成度ヘーレン氏ヨリ堅ク頼
マレ矣若モ強テ下山スルナラハ本社ヘ御立寄ハ御免蒙リ
タシト云勢ニ付當分御留リ可然ト申送ル同廿八日(旧藩主
松平忠禮公ヘ一書ヲ呈シ旧藩人ノ共有金ヲ實業ニ使用ス
ルカ又ハ他ノ利益増殖法ニ改メラレ現在困究シ居ルモノ
ヲ御救助アラセラレ度旨ノ意見ヲ陳述ス)同廿九日鑛山ノ

屋須ヨリ報告ニ又鑛山ニテ坑夫伊藤ト荻谷ト喧嘩シ荻谷
負傷セリト

木も生たるも飛すねとあゝの言のまゝな本をかきく山

同夜高橋君ヲパナマ追送リシ岡山生来リ金錢衣類悉皆盜
難ニ逢候ニ付赤面ナカラ一寸申上ケ置クト余之ヲ信スル
事能ハス同廿日ヘーレン氏曰田島ヨリ来状ニ彼ハ秘魯ヲ
去ルト申来リ矣ニ付責下ヨリ其理由ヲ糾シ且意見申越ス
ヘキ様通シ吳ヨト云フ小池ノ依頼ニテ日本々社ニ在ル技
師河野毓雄へ出便ス又當地ノ事ハ災害弄ヒ到リ困却ノ次
弟ナリ尤高橋君ヨリ委細御聞取りノ事ト存ス小池氏モ儉
約致シ居リ矣云々同廿一日田島及カ―デナス両氏ヨリ電
信ニテ今年後三時坑夫頭加藤要助カ田島技師ヲ害スルト

(山田紙店製)

云フ事ニテ加藤ハヤウリニ牢舎申付矣就テハ来ル水曜日
ニ田島并ニ坑夫一同御指圖ヲ待テ下山スト申来矣由ヘー
レン氏ヨリ通知アリ右ニ付ヘーレン氏明日余ヲ訪問ノ筈

物多き山おろしまたかれは新さし

六月一日ヘーレン氏ハ余ニ依頼シ田島へ穩便ニ致シ且加
藤へモ同様申送ラレ度又余ニ来ル水曜日ニ登山シテ惣テ
ノ始末ヲ付ケ吳矣様申来矣ニ付其旨電信ニテ田島へ通達
ス同二日同三日ヘーレン氏ヨリ又登山見合せ吳レ矣様申
来ル同四日午前七時臨時雇バイン及大関登山ス同五日同
六日高橋君へ六月十一日迄ニ受取ルヘキ金負悉皆受取濟
ミ并ニヘーレン氏ヨリ依頼ノ田島ノ事モ申送ル同七日同
八日日本ヨリ本月六日出ノ電信ニテ昨五日高橋歸朝セリ

ト申来ル同九日ヘーレン氏来リ曰在カラワクラバイン氏
ヨリノ書状ヲ示シ田島ハ下山ヲ企望ノ様子ニテ加藤ニ登
山ヲ許サバ余ハ是非共下山スト言ヒ張リ居矣由云々田
島ニシテ若下山セハ余ハ病氣ナルニモ拘ハラズ差向キ登
山セサル可カラサル事情ニ相成リタリヘーレン氏又曰山
ニテ坑夫等度々相騒キ矣ハバ外聞モ悪キニ付余ニ坑夫等
ヲチヤンチヤマヨノ農場ニ當分ノ間連レ行キ貫ヒタシト
余ハ私自ラ之ヲ統御セハ敢テ地ヲ賣フルノ必要ヲ認メザ
ル旨ヲ以テ答フ同十二日ヘーレン氏ピエドヲト共ニ来リ
鑛山ノ始末ニ付談シ坑夫一同ヲ里馬ヘ引取ル事ニ定メシ
カ又一妻シテ是非共余ニ一度登山シテ支配シ田島ハ隨意
ニ任ストシ坑夫等モ已ムナクハ下山モ宜敷ケレト免ニ角

(山田紙店製)

日本ヨリ山田技師来ル迄ハ成ルヘク差留メ置カレタシト
ノ事ニ付余モ同意シ愈明後十四日登山ニ決ス同十三日ヘ
ーレン氏ヨリ受取ル筈ナル七百五十磅ノ内百磅ヲ受取り
丈々配濟シ高橋君ヘ今日迄ノ事情ヲ悉皆申送ル同十四日
午前六時余將ニ登山セントス日本人一同余ヲ停車場ニ送
便所ニアル中誤テ汽車ニ乗り後ル已ヲ得ス空敷ク歸社シ
来ル水曜日ヲ待ツ事トセリ余ハ我遲鈍ナルヲ歎息セシモ
配下ハ余カ日本ヨリノ報ヲ當地ニテ待受クルノ必要アル
ヲ唱ヘ大ニ喜ビ居レリ同十五日十六日十七日十八日午前
八時余一人登山ス配下皆停車場迄送ルバソングブリオ要書
ヲ持来セリ午後七時チクラニ着スルカス馬ヲ以テ待ツ
同十九日午前七時半馬ニテ發ス午後三時半カラワタラニ

着ス此時余カ身体未タ全ク回復セス数里ノ安鐵斯山ヲ疾
驅シタル為メ鼻血甚敷ク出ツ馬ニ飲カハスト共ニ谷川ニ
臨ミ頻リニ頭部ヲ冷シ漸ク止ムル事ヲ得タリ噫君余茲ニ
倒ル、共誰カ又我骨ヲ埋ムルモノアラシヤ併シ此モ亦青
山ナル哉同二十日田島バイエシ、カーデナス并ニ坑夫等ヨ
リ各別ニ事情ヲ聞キ取り以來ハ余カ坑夫等ヲ監督スル事
ニ決シヘーレン氏へ直ニ書ヲ送り坑夫等ノ事ハ穩便ニ糸
ルヘキ見込ニ付安心セヨト申送ル

同廿一日バイエシヨリ百四十四ソトレス十二セ夕ボヲ受
取り坑夫等へ六月未マテノ差引勘定ヲシテ渡ス同廿二日
伴ヨリ来状ニ曰ク田島氏ハ我會社創業以來ノ大関係モア
レハ成ルヘク勘辨シテ説諭頼ム又ヘーレン氏ノ代人ナル

(山田紙店製)

バイエシ氏へ坑夫等敬禮ヲ添サ、ルハ間接ニヘーレン氏
ヲ輕侮スルニ當ルト云フニ付事々御注意ヲ頼ム云々高橋
君へ出便シ若本社ニテ優柔不断ニテ万事果敢取り申サス
矣ハ、余カ店ノ都合ニ言寄セ呼戻シ下サレ度旨頼ミ遣ス
同廿三日廿四日田島ハ賄方小林ヲ引連レ下山ニ付ヘーレ
ン氏へ左ノ書面ヲ送ル

以寸書得貴意矣陳ハ拙者登山後加藤云々ノ件詳細取調矣
如全ク役負ノ取扱方粗暴ニ出矣様被存矣ニ付加藤ハ其儘
差許シ猶我坑夫向後ノ規則相立何レモ満足徒業仕居矣又
坑夫等カ役負ニ對シ無禮ノ趣キ御申越ニ御座矣得共彼等
ニ於テ決シテ故意ニ右様ノ振舞致矣譯ニハ無之矣尤以後
充分注意可致旨嚴重ニ申付矣聞御了解可被下矣又田島へ

ハ會社創立ノ際百事大切ノ場合ニ付一身上ノ事ニ至ル迄
注意ニ注意ヲ加ヘラレ度旨利害ヲ述ヘ説諭致シ別テ當國
ヲ離ルハ云々等ノ儀ハ以テ外ノ心得違ニ付右様ノ事ハ屹
度改心可致申聞ケ矣尤御依頼事件ノ内當國ヲ離レヌ云々
ノ約束書ハ我輩罪人ニモ無之ニ付認ノ乘矣ト申矣ニ付克
々口頭ニテ誓ヒ置矣事ニ御座矣御地へ田島滞在ノ上ハ當
方ニテ監督ハ致方モ無之儀ニ付貴君ニ於テ可然御取扱可
被下矣此段豫ル御断リ申置矣也但シ當人ノ用向ハ貴君ニ
ハ御承知ニ可有之矣得共拙者ニハ更ニ相分リ不申矣賄方
小林ナルモノハ元來柔弱ニテ氣候ニ耐ヘカク已ヲ得ス
下山差許矣御地ハ暖氣ニ付直ニ回復植木屋ノ手傳等ニハ
至極適當ノ者ト奉存矣早々頓首

(山田紙店製)

同廿五日廿六日屋須弘平養生ノ為ノ暫時ノ間下山治療願
出矣ニ付ヘーレン君ノ指揮ニ任セル旨里馬へ申送ル午後
十時ヨリ雪降り初ム同廿七日終日雪降ル但シ當國ハ五月
ヨリ冬期ト唱フ同廿八日終日雨雪交々降ルカーデナスヤ
ウリニ行ク屋須吉田佐々木等病氣ニ付ヤウリヨリ醫者ヲ
招ク同廿九日廿日伴へ出便其畧左ノ如シ
日本々社ト條約破綻ノ事ハ疾ニ拙者ニ御洩シ被下矣テモ
可然ト存矣又一同下山セハ拙者ニ一同ヲ引連レ来レトノ
意味ナルカ此度ノ事ハ條約成否ノ点ニアレハ左程驚ク事
ニモ無之此上ハ御同様名譽ヲ保護スルノミ弥下山セヨト
ノ通知迄ハ相待可申矣且貴論ノ如ク下山ノ節ハ他ニ自立
タヌ様三四人ツ、ボツボツ相成可申矣其到着場所ハカ

ヤ才港可然カト愚考仕次ノ火曜日ニハ屋須氏病人三人
 程引連レ下山スヘシ田島ハ諸君ノ力ニテ是非共差留メヨ
 後日ノ責任ハ余ニ於テ閑スル処ニ下ラズ鑛支帰朝ニ相成
 美節ハ風帆船ハ御断申美汽船上中下ノ直段御調べ置キヲ
 乞フ受取ルヘキ殘金ハ下山ノ當時悉皆御渡シテ乞フ事ニ
 依リ別ニヘトレン氏ヨリ借金致シタシ云々

此之れと称ヤテテ立馬雇凡々あるはちの振つ司
 付てはしはねあふ古つのも初めの事あり

子取の心矢年のやう山つゝぬきとぬき我のぬきとぬき

妹せん子よあはれ

朝夕の秋糸玉代りめとあつて只一本の老のまき木

兒女を思ふ

(山田紙店製)

我々のやねびの庭のあつては遠くあつては

七月一日田島へ出便貴君ノ調査モ一見致シ且日本へ戻ス
 者ノ都合モ御打合致シ度ニ付拙者下山迄ハ是非御待被下
 度美君ノ荷物ハ明日出ス答吉田モ御立迄ニハ間ニ合セ可
 申小池モ幾重ニモ君ヲ保護可致所存ニ付可然御取扱有之
 度美云々ヘトレン氏へ出便小倉及勝村両氏ニ御托シノ貴
 書正ニ落手致美何故破綻スルヤト日本へ向合云々ノ事ニ
 付テハ最初日本ヨリ貴下へ宛タル電文兼知不致美ニ付更
 へ了解ニ苦ミ居美如伴氏ヨリノ書状ニテ相分リ申美就テ
 ハ以来貴報ニ接スル迄ハ従前ノ通りニ致シ居リ可申美破
 綻ハ實ニ残念至極ナレトスナリテノ上ハ只善後ノ策ヲ
 講美外ナカルヘシ田島ハ談ホテルニ居美旨案内ニ付可然

御照會ヲ乞云々小池へ出便里馬ノ事ハ高橋君ヨリ伴へ頼
ミ置矣ニ付カイヤオノ事(同地ニ療養致度旨モ同意ナレト
惣テ伴へ申遣置矣間御聞可被下矣又へレレン氏ノ頼ミニ
テ今一應日本ヨリノ返電ヲテ待矣様被申矣ニ付教日間
相待矣得共帰朝用意ハ今ヨリ致居矣田島ハ能ク交ルヘシ
萬一脱走ノ様子アラハ電報セヨ御頼ミノ事ハ取計申矣小
倉勝村へ且敷願度矣云々同日三日へレレン氏ヨリ来状
ニ称本日ヨリ結社不調ト相極り矣ニ付都合次第里馬へ引
揚ケ可申旨申来リ夕リ本日残ラス荷物ヲ出シ明四日余及
屋須鑛夫一同ヲ引連レ下山スル事ニ決スヤウリヨリ醫師
フレニチレン来リ別テ告ク伴ヨリ田島ハ去ル六月廿八日
ニ脱走セリ小倉勝村モ本月一日頃脱走ノ由ト申来ル此報

ニ接シ余ハ田島ノ實ニ不埒千方ナルヲ憤ル如何トナレハ
余ハ會社ノ為ノ又同人ノ為ノ前後ノ處置ヲ為シ責メテハ
立派ニ當國ヲ引揚ケ日本ノ體面ヲ瀆サハル様ニト羞トナ
リ日向トナリテ苦心奔走セシヲモ更ニ顧ル事ナク無責任
不人情ニモ跡ハ野トナレ山トナレト漫然脱走シタレハ也
留別ノ為ノ鑛夫頭カマ今ヨウ始メ土人鑛夫一同へビスロ
堯樽(砂糖製火酒十二ソールス)ヲ与フ三十一行李ヲヤマ(Planes)駝ニ似テ小ナルモノ百斤位背負フニ負セ山ヲ下
ス夜カーデナス氏ト別盃ヲ舉ク彼事業ノ不成立ヲ歎キ且
別ヲ惜ミテ余ヲ抱キテ號泣ス因ニ記スカイデナス氏ハ引
スパニヤ人種ニテ現大頭領カ孤兵ヲ提ケテ一夜ノ中ニ里
馬ヲ占領シ居ル智利ノ兵ヲ困ミ遂ニ里馬ヲ回復シテ大頭

(山田紙店製)

領ニナリタル其人ハ傳令使ヲ勤メタルモノニシテ現ニ少
佐相當ノ人ナルガカラワクラ鑛山ニ在リテハ余ト同勤ニ
テ彼ハ土人ヲ坑夫ヲ支配シ余ハ邦人ヲ支配シ互ニ相親睦
シテ兄弟ノ如キ交情アリシナリ彼ハ真ニ好人物ニテ馬術
ノ達者ナルヲ余ハ未タ他^其見サル程ノモノ也余等カ秘魯
ヲ去ニ當リ彼亦辞シテ余等ト船ヲ同フシテ他ニ向ヘリ
同四日大関ハ山ニ残り本人一身上ノ事ヲヘーレン氏へ傳
言頼マル午前九時半一同カラワクラ鑛山ヲ引揚ケ里馬ニ
向フ坑夫等ハ一同チクテ迤歩行シ得ルモノト認ムルモ或
歩^ム能ハサルモノアルモ計ラレヌトノ事ニ付「ム^ト馬ト
驢馬ノ相ノ子ヲ糞合ヒシ如^ク一頭ニ付九ツトレス宛トノ事
ニテ餘リ高價故見合ス尤會社ノ馬ニ足アルヲ代^ハ合フテ乘

ル事ヲ許可シテ行ク然ルニ途中ニテ教人歩行シ得ヌト云
フニ付屋須ノ馬ヲ賃シテ夫レハ定宿マテ着セリ其他ハカ
サバルカニ留リ最早歩行出来ヌト云フ余思ヘラクチクテ
ヨリ一同ノ同意ヲ得テ来リシニモ拘ラス今ヤ歩行シ得ヌ
ト云苦情ニ遭遇スルハ遺憾ナリ依テ一同ニ諭シテ曰ク此
度ノ事ハ仮令ハ我等ハ負ケ軍ナリ故ニ万事ニ付一同ニ滿
足ヲ与フル事能ハス去リナカラ一同ハ苦勞ハ萬々察シ居
ル依テ聊ナカラ各港ソールス宛ト此ビール半打ヲ慰勞ト
シテ与フルニ付之ニテ勢ヲ付ケ今一日大ノ我慢ニ付勉強
シテ歩メド申渡セハ一同悦服ノ体ニテ歩行ヲ繼續セリ實
ハ限リアル金ニテ一行ヲ連レ歸ル事ナレハ決シテ豫算外
ノ金ヲ使フノ餘地ナキナリ然ルニ前以カ^レデナスニ頼ミ

チクラ宿泊ノ用意ヲ為サシメシニ来テ見レハ夜具ノ用意
ナシト云フ驚テ急ニ無理調達ヲ為セリ屋須及鈴木ハ後レ
タルニ付乗馬ニ足ヲ出シテ途ニ迎ヘシム彼等ハ他ノ坑夫
等程不服ノ体ナシ余及屋須カトデナスハホテルニ宿ス同
五日午前七時チクラヲ發ス荷物間ニ合ハズゴローレニ頼
ミ後ヨリ送ラシム一同ニ晝飯料四ソイレスヲ与フ然ルニ
カトデナス等之ヲ知ラス別ニ停車場ニテ晝飯ヲ注文セシ
カハ之亦分与ス午後四時過ル頃里馬ニ着ス目立タヌ様ニ
トノヘレシ氏ノ願ニテ一同ヲ馬車ニテウエルタノ本社
ニ送込ム日本人皆停車場ニテ迎ヘタリ

去安山

忽患脱虎穴、自若下山、丘虎子雖無得、金生以足酬。

(山田紙店製)

里馬本日迄ノ成行キノ事情ヲ各ヨリ聞取り夜半過キ寢ニ
就ク晝夜小倉勝村来リ日本ニ連レ帰ラン事ヲ乞フ余曰ク
未タ本社ノ大体話モヘレシ氏ト為サス會計ノ都合モ如
何アルヘキカ且出来得ルトスルモ會社ノ金ヲ流用スル權
理ナキニ付能勘考ノ上御返事ニ及フベシトテ別ル同六日
本日ヘレシ氏来リ會談スヘキ筈ニ矣如来ラレサルニ付
伴屋須同道致シ呉ルノ様申来矣間我ヨリ出向キタレハ
レシ氏ハソーフアニ横タハリ手中ニテ面ヲ覆ヘ頗愁歎
ル体ニテ誠ニ困タ事ニナリマシタト云フノミ余モ氣ノ毒
ニ思ヒ一通リ鑛山引上ケノ情况ヲ述ヘテ匆々去ル明日バ
ソングリオ来リテ會計ヲ示ス約ナリ同七日午前伴トヘ
レシ氏ヲ訪フカトデナス来ラサル為ノ用ヲ便セズ空ク去

ル同日杜室ニテ余ハ伴其他兩三人ト「テロブル」ヲ囿ミ雜談
 シ居タル中俄然後方ノ戸ヲ排シテ「ヘーレン」氏入り来リ余
 カ前ニ居ル伴ニ向ヒ立チナカラ電信ヲ投ケ出シ是ハ誰カ
 出シタルノデスカ是ハ日本ノ言葉デスト大ニ立腹ノ風ニテ
 アリシカ余ハ更ニ知ラヌ顔ニテ居タリシニ伴ハ甚迷惑シ
 タル有様ニテ一向存セスト云「ヘーレン」何ノ挨拶モセス沸
 然トシテ立チ去ル實ハ此電報ハ余カ高橋宛ノ暗号電信ヲ
 彼岡山生ニ竊ニ出サシノタルモノナリキ余以為ク之レカ
 「ヘーレン」ノ手ニ入リシハ慥ニ電信技手ノ不正行為ナルカ
 又ハ岡山生カ既ニ「ヘーレン」ニ買収サレタルモノナランカ
 ト蓋四面皆敵ニテ容易ナラサル形勢ナル事ヲ覺悟セリ此
 時ニ當リ同行十七人中心事ヲ談シ得ルモノハ只大工職久

万勇六一人アリシノミ偕尔来田島ノ行衛更ニ相分ラサル
 ニ付探索トシテ屋須及小池ヲ徒ヒカイヤオニ行キ同所ニ
 仮居セル岡山生ヲ尋ネ詰問スレト一切知ラヌト云余彼ノ
 容兒ヲ見ルニ甚怪ムヘキモノアリ依テ嘗テ彼ニ命シテ「チ
ヨリヤ」スヨリ高橋ヘ電信ヲ出サシメタレハ其受取書ヲ示
 セト迫リシニ宅ニ置ケリト云持チ来レト云ハ暫時ニシ
 テ歸リ印章モナキ英文ノ請取書様ノモノヲ提出ス余以為
 シ是實ノ證書ナレハ無論「エスバニヤ」文ニテ印章無カルベ
 カラ大ト依テ猶嚴重ニ其偽證ナル事ヲ詰責スレハ彼ハ真
 正ノモノナリト對フレト其面色ハ泥ノ如ク變ス然モ余ハ
 猶彼カ悔悟シテ實ヲ自白セン事ヲ冀望シ且早速田島ノ行
 衛ヲ發見報知セン事ヲ言ヒ含メテ別レ去ル同八日「ヘーレ

シ氏ヲ訪フ然ルニ又美カーデナス帰リタルヲ勘定出来
スト云フ本日又小池及久万ヲカイヤオニ遣シ岡山生ヲシ
テ田島ノ行衛ヲ尋ネシム船舶出入簿ヲ調ヘタル結果彼ハ
慥ニ去ル六月廿八日出帆セリト云フ本日日本ヨリ「イツシ
ツパシカ」電信来ル「コンゲツチユウジユン」ト返電ス
抑今回ノ事業失敗ニ歸シタル責任ハ主トシテ誰ニ在ルカ
ト云フニ談鑛山ヲ調査シテ買入レタル田島技師ト當地ニ
在テ數年來鑛山事業ニ従事シ此買入レニ主腦トナリテ周
旋シタルヘーレン氏トニアルハ公平ノ認定ナルヘシ曩ニ
余カ鑛石ヲ調査シテ此山ノ見込ナキ事ヲ高橋委員長ニ内
報スルヤ高橋君ハ驚愕ノ餘決心スルト同時ニヘーレン氏
ハ斯業ノ破レン事ヲ恐レ是レ調査ノ誤謬ナリト大ニ怒リ田

(山田紙店製)

島技師ハ高橋君ノ前ニ平身低頭シテ泣キ絶リテ曰ク實ハ
私ハ談山ノ内部ハ委敷調査セサリシ夫レハヘーレン方ノ
人々カ私ヲ馳走シテ詳細ノ調ヘヲ為サシメサリシナリ今
更誠ニ申訳ナシト只管讒ト入りテ夫レノミノ失策ナリト
甘々脱ケ去ラントノ意志ナリシナラシメ田島ハ脱走シタ
レハ更ニ詰問ノ方便ナシ然ルニヘーレン氏ノ主張ハ山ハ
決シテ惡クハアリマセン(之ハ惡シト云ヘハ更ニ之ヲ他人
ニ賣ル事ノ叶ハサレハナリ)田島サンカ見テ善ト云テ買ヒ
マシタカラ私ハ存シマセン全ク田島サンカ惡イノデゴザ
イマス左右シテ彼ノ人ハ「ゴムミ」ヲシヨシテ請求シテ誠ニ
夏青蠅クツテ困リマシタ山へ行ケハ其催促カ出来マセン
モノダカラ足ノ痛ミニ託シテ里馬ニ居リ始終催促バカリ

致シマシタ云々余ハ事實ヲ吐カシメテ本國へノ土産ニセ
ント思ヒシ故ニ答ハテ曰ク夫レハ嚙御困リテシタロウ夫
レデハ田島ハ何程「ゴムミツ」シヨシヨシヲ貫ヒマシタカ彼曰ク
實ハ最初山ヲ買フ時ニ之ハ善イ山ダト云ヒ買ヒソニシ
テ却々決断シナイテ困リマシタガ是非共此事業ヲ成立シ
セタイト思ヒマシタカラ色々苦心シマシタカ畢竟之ハ「コ
ムミツ」シヨシ「カ」欲ヒカラ決答セヌノダロウト思ヒマシタ
カラ遂ニ歩ヲ遣ル事ニ取極メタ次第デゴザイマス而シテ
本人ニ渡シタル金額ハ都合ニ万八千圓計リテゴザイマス
其當時「ピエド」ラ申シマスニハ日本側計リ歩ヲ取ルハ不
公平トノ事ニテ同人ニモ同様遣ス事ニ致シタノデゴザイ
マス（ピエド）ラハ曰ク私ノ名テ貫ヒマシタケレ共詰リ皆へ

トレンサンニ遣リセシタノデス余曰ク能ク解リマシタ夫
レデハ私が日本へ歸リ決シテ貴方ニ無理ハナイ全ク田島
カ悪ルカツタノダト云フ事ヲ證明シタイト思ヒマスが只
口上ノミニテハ信用シカヌルカモ知レマセンカラ何卒其
大意及金高等ヲ書面ニ認メテ下サイマセンカト云へハ彼
ハ承諾シテ證書ヲ作り与ヘタリ同九日午前十時伴屋須及
カーテナスト共ニ「トレン」氏方ニ會合シ勘定ヲ為スヤウ
リ騒動一件ニ付テハ勘定ハ決定セス

(山田紙店製)

無端一夜夢刀頭漫載羈愁在客舟

白露清風秋万里天邊那處是皇洲

同十日鑛夫等ノ荷物盡ク山ヨリ着ス伴ト汽船會社ニ行キ
来ル十五日出帆ト定メ横濱迄ノ切符ヲ約束ス汽船ハ「ラン

タロ一号船長ハドンゴールナリ同十一日一同へ給料ヲ渡
ス同十二日青木傷所畧回復シテ初メテ病院ヨリ尋ネ来ル
ヘーレン氏ヨリ総テノ勘定差引金ヲ受取ル尤青木ノ病院
入費ニ付甚面倒ナル談判アリタリ

會社の庭園を締めくくつて

常琴本も花の名をもさうつらぬうゑきたの庭の終の夕と礼

同十三日當初高橋君カ日本ヨリ持参ノ土産物残り一切ヲ
屋須ニ渡ス此金^高百五十一圓餘ナリ同十四日バンコク、ロ
ドレス(倫動銀行)へ行キ七百五十磅ヲ受取ル(一磅ハ六十ソ
ーレス三十七セシタボナリ)南米汽船會社出張所ニテ三人
分上等切符^{パナマ}追兩人分日本追外ニ十六人分下等日本
追買フ此金三千九百八十八ソーレス八十セシタボナリ小

(山田紙店製)

倉勝村氏モ同行ス船賃ハ右ノ内ニテ立替セルモノナリ同
十五日十六日東京藤村宛ニテ「アスイチドウシユツパン
ヤマクチ」ト電報スヘーレン氏ハ暇乞ニ行ク氏曰ク誠ニ不
快ニ付社負へ書状出サス宜シク御頼ミ申ス若嶺夫ノ内一
人残り度モノアラハ残シ置カシ事ヲ申出テタルニ付相談
セシカ皆前ル事ヲ欲セサリシ余亦好マサリシナリ
同十七日午前七時一同ウエルタノ本社ヲ出發ス荷物ハ五
十四個ニテカイヤオマテ運賃七十八ソーレスナリ是皆伴
ノ取計ヒニ任セシモノナリ午後零時十五分カイヤオ港ヲ
發ス此行小倉勝村ノ外豫テヘーレンカ使用シ居タル庭師
松本辰五郎ヲモ連レ帰ル

半年の夢れ白や露初日の出

整頓一行去白露國

振衣安嶺白雲頭洗足里河碧水流

十八男兒揮首去胸襟快豁月明

同十八日帰航ニハ最早道中慣レテモ居リ且手荷物ハ側ニ置ク方便利ト申出矣ニ付各ニ渡ス然ルニ鑛夫萩原豊次昨夜荷物ヲ盗マル船長へ届出相尋矣如炭部屋ヨリ諸品ヲ發見シタリ青木ヲ船醫ニ診察セシム午後二時二十分サラヴエクノニ留ル同十九日午後二時パイタニ止ル同廿日正午グワヤキトルニ泊ス東洋人ハ一切上陸ヲ許サスト云フ一同皆怒嘩ス同廿一日昨夜田口又手荷物ヲ盗マル明細書ヲ作り船長ニ訴フ同廿二日昨夜平向又手荷物ヲ盗マル彼等ハ已レカ枕ニシツ、アル荷物ヲ取ラル、モ更ニ感セス其

(山田紙店製)

厄介サ加減豈驚カサルヲ得ンヤ同廿三日午後十一時半パイマ港ニ入ル同廿四日午前六時小蒸汽船ニテ上陸ス小池屋須ト例ノグラントホテルニ宿シ他ハ皆イタリヤホテルニ宿セシム同廿五日伴へ禮状ヲ出ス高橋君へ「夕ジマイツクニガスナト電報ス(百十五度)同廿六日小池屋須久万ト」カナル旧工場ヲ一覽ノ為ノ汽車ニテ行ク工場及社宅等荒廢ニ歸シカナル入口ニハ小汽船ノ沈没ノ遺棄シアルヲ見ル途中ニ支那人ノ墳墓數百アリ先年来工事ニ落命セシ工夫葬地ナリト云フ同廿七日廿八日太平洋汽船會社へ行キ切符ヲ引替へ且屋須ノ為ニグワテマラ迄ノ切符ヲ買フハ拾弗ナリ右屋須ハグワテマラニ旧住所及妻モアル由ニテ該地ニ止ルモノナリ同廿九日小池久万ト馬車ニテ所々ヲ

巡視ス同三十日廿一日正午荷物ヲ舩ニ積ミ午後二時コリ
マ号ニ乗込ニ同五時桑港ニ向ヒ拔錨ス此ニ到テ殆ント家
郷ニ近キタルノ思ヒアリタリ八月一日朝来雨アリ清凉ヲ
覺ユ夜大雷雨アリ同二日三日四日午前五時サンサルバド
ルノリベルタツドニ着ス此地目下戦争ニテ甚騷カ敷シキ
ト云フ此所今ヤ太陽真正面ノ上ヲ通ル時ナリト云々午後
零時四十五分發舩ス五日六日午前五時ゴワテマラノサン
ホセニ着ス小池ハ屋須ヲ棧橋迄送り歸リゴーストフヒバ
一ヲ受ケ来ル急ニ大熱ニテ甚苦ム舩醫ニ托ス英國人夫婦
ノ舩ニ乗込ムモノアリ云フ余ハ此地ニ「コーヒー」烟ヲ持ツ
モノナルカ當國ノ百姓ハ實ニ懶惰ニテ困ル就テハ貴國人
雇ヘ度キモノナルカ如何トノ事ナリ余ハ試ミニ其手當ヲ

(旭商會製)

問ハハ一人一ヶ月二十弗位ト云フ余ハ此度ハ一應歸國セ
ネハナラヌト話ヲ進メサリシ次額長尾秋水松前城下之作
跋涉高山兼大潮變遷雖極志何揺
既看破日南珠去欲訪北辰星下標
同七日午前五時千ヤンペリコニ着ス之亦グワテマラ領ニ
テ戦争中ナレト様子更ニ相分ラヌ晝拔錨ス

大平子今日も寢食の士族の如
支度の鐘も小意松うたれた
孤雲
久万

同八日九日午前五時アカプルコ港ニ着ス余上陸桑港日本
領事三宅宛次ノ電信ヲ發スコヲフ一七レイノヤドシウセ
ンヲ子カフヤマクチ同十日十一日マサツランニ泊スノキ
シヨ領ニテゴルフオフカリホルニヤノ入口ナリ人口二万

五千人鑛山大分アル趣同十三日午後六時拔錨同十四日
 十五日十六日十七日十八日十九日日々長々敷カリホルニ
 ヤノ沿岸ヲ航ス同廿日午前九時桑港ニ着シ小池及小頭等
 ヲ從ヒコスモポリタンホテルニ宿ス鑛夫等十三人ハメ
 ソンストリートノ日本人ノ家ニ宿セシム領事川北氏ヲ訪
 フテ謝禮ヲ述フ同廿一日東京藤村紫朗宛發電スヘキン号
 ニテ明日出帆スヤマク子同廿二日ロンドンバンクヘ行キ
 五十磅ヲ二百四十弗ニ兩替ス午後一時日本ヘ向ケ拔錨ス
 同廿三日廿四日行程二百五哩同廿五日二百八十四哩同廿
 六日三百哩同廿七日二百七十八哩同廿八日二百六十八哩
 同廿九日二百八十四哩同卅日二百八十八哩同卅一日二百
 四十六哩九月一日二百四十二哩同二日日本日一日ヲ失フ同

(旭商會製)

三日二百五十二哩

六旬航路意悠々又被西風吹散裘

賓雁弄聲秋万里一鈎新月懸檣頭

故郷の舟をいかに礼か飾年の墨染竹かくしやは好む
 故郷の舟を飾る何とねも赤き心と志多人は志す

同四日行程二百七十二哩

海鳥や道才を踏赤し雨の御

同五日行程二百八十六哩

涉世爲形後浮沈紅埃中

壯心常落々雲外御高風

同六日行程三百四哩同七日二百八十六哩同八日三百二哩

同九日二百九十九哩一同へビール及林檎ヲ与へ聊航海中

勞ヲ慰ム道中ノ決算ヲ為ス

同十日午前八時横濱ニ着ス高橋是清高橋長秋相馬與太郎
(旧上田藩士ニテ藤村氏ノ家計ヲ掌ル)井上某(最初ヘーレン
氏ノ使トシテ歸朝セシ人)氏等一行ヲ迎フ午後四時二十分
ノ汽車ニテ歸宅ス鑛夫等一同ハ新橋ノ蓬萊屋ニ宿セシム
高橋是清君ト談話^ヲ盡ス

茲ニ吾人ノ驚キタル事ハ日秘鑛業會社ハ我等ノ歸朝ヲモ
待タズ既ニ解散セリト云フ事ナリ余ハ今回白露ニ於ケル
非運ニ際シテモ一意ニ會社ノ為メニ善後策ヲ講シテ一行
ノ始末及金錢ノ節約等ヲ至ル迄充分ノ注意ヲ拂ヒ無智横
暴ナル鑛夫等カ途中金錢等ヲ請求セシカ共元ヨリ餘金モ
ナク且ハ委員長ノ言置キモアリシ事ナレハ之ヲ断リ又ハ

(旭商會製)

論シテ歸朝ノ上ハ必相當ノ慰勞金ヲ請求シ遣スヘケレハ
道中ハ辛抱セヨト申聞ケ遂ニ滞リナク一行ヲ連レ歸リテ
會社ニ引渡サントスレハ既ニ會社ハ解散シテ一同ニ相當
ノ手當ヲ遣シ度モ最早金錢ノ出処モナシト云フ有様實ニ
呆レ果テタル次第ナリ斯テ已ムヘキニアラサレハ會社殘
留負ノ類ミニテ余ニ与ヘラレタル金ヲ以テ一ト先一同ニ
分与シ不服ナル彼等ヲ歸郷セシメタル次第ナリ余ハ實ニ
堂々タル日本ノ紳士紳商ト云ハルノ人ノ不徳無情ナルニ
慨歎セリ之ニ付思ヒ回セハパナマニテ小池ハ余ニ言ヘリ
山口サン貴下ハ左様ニ正直ニ會社ノ為メ儉約セラル、ケ
レ氏鑛山杯遠ル人ハ薄情ナモノニテ能始末シテ来テ呉レ
タト思フモノハアリマセンカラ夫レヨリハ茲ニテ一同ニ

遣リテ喜ハセタ方カ上策ナラント余ハ笑テ夫レハ左右カ
モ知レヌカ仮令會社ノ人カ薄情ダロウカ僕ハ僕ノ主義ト
云フモノガアルカラ夫レハ曲クル事ハ出来ナイヨト云ヘ
シ事アリ然ルニ今日ニ至リテ見レハ果シテ小池ノ言ノ如
クナリシニハ何共申訳ナキ次第ナリ
同十一日日本橋區柳屋ニ旧會社負ト會シ白露事變ノ大畧
ヲ陳述ス同十二日旧會社負ノ有志ニ招カレ余ト小池ハ上
野櫻雲台ニ行ク出席者三浦梧樓高橋是清高橋長秋高田慎
藏藤浪忠言氏等教人ナリキ此時藤村紫朗原告トナリ技師
田島晴雄ニ對シ白露國ニ於ケル詐偽取財ノ訥ヲ起ス事ト
ナレリ同十九日高橋長秋ハ白露ノ勘定書三葉ヲ渡ス同廿
一日兩高橋ハ道中日記并ニ諸書類ヲ提出ス同廿日白露伴

龍氏ハ出便徒来ノ禮ヲ述ヘヘーレン氏并ニ株主ノ為ノニ
田島技師ヲ訥フル事ニ相成矣ニ付證據物トナルヘキ書類
被送度且大関ノ身上ヲ頼ミ遣スカーデナス及ヤウリノ醫
師ハ書ヲ送ル十月一日高橋長秋ハ鑛夫田口ノヒストリアル
ヲ渡ス

右ニテ旧日秘鑛業會社ノ殘務モ殆ント終結ヲ告ケタルニ
付斯ル紅塵ノ中ヲ避ケテ寧北海道ニ趣キ淡白ニ餘生ヲ送
ラント欲シ同月十四日ヲ以テ遠征ノ途ニ上レリ

新日影ナリ甲斐もなく消へて

らりみぢ殊す白露の國